

049

049-To23-2ウ

23

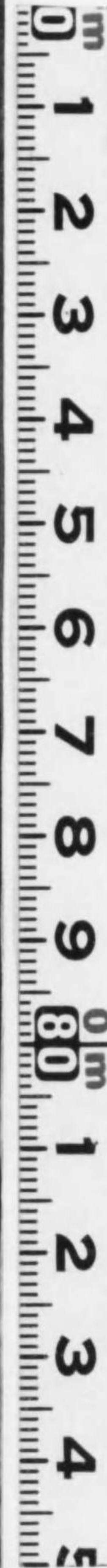


1200500724522

# 月の林伯

著 實 郷 東

刊 房 山 富



# 始



隨筆  
伯林の月



紀元二千六百年

049  
To<sup>23</sup>  
2

東郷  
實著

富山房刊



隨筆  
伯林の月

東郷  
實著

富山房刊

## 序

私が隨筆『三等に乗りて』を出してから、もう六年にもなるが、その間いろいろの新聞雜誌に物した隨筆は可なり多くの數に達してゐる。

従つて、これが上梓を勧めてくる向も鮮くないのであるが、現下の重大時局に鑑み、少しでも紙を大切にすることが、われ等國民の義務なりと考へ、今日までそのことを躊躇してゐた。然るに時は正に皇紀二千六百年！遂にこれが刊行を決意し、再び富山房を煩はすことにした。

本書は『三等に乗りて』の姉妹篇とも稱すべきものである。而してその收むるところの百十六篇は主として郷里の鹿兒島新聞に寄せたものであつて、特に明日の祖國日本を双肩に荷つて起つべき若人達を對照として筆を執つた場合が

多かつた。私は日頃極めて忙はしい政治生活を営んでゐるものである。併し本書は寧ろ政治家としての立場を超越し、もつと広い視野に立ち、貧弱ながらも「人間東郷」としての何ものかを表現したつもりである。

幸に大方諸君子の一讀を仰ぎ得ることが出来るならば、著者の光榮これに過ぐるものはない。

昭和十五年九月十六日

仲秋の月に照されつゝ、麻布の茅屋吟南莊にて

東郷 實識

## 目次

雨の降る日	(一)
ヒンデンブルグの死	(五)
國際危局突破の用意	(八)
角箱に丸杓子	(二)
くわんじん橋	(一四)
苦學の青年	(一七)
秋の蟲の音	(二)
伯林の月	(二四)
梨と金時計	(二八)

結婚の問題……………(三)

目黒の秋刀魚……………(三)

まこと……………(四)

出世の秘訣……………(四)

鐘の音……………(四)

病める兒の涙……………(五)

哲人出でよ……………(五)

『死』は平等に来る……………(六)

伯林で日本語の演説……………(六)

無言の雄辯……………(六)

江戸男……………(七)

『愛』に出發せよ……………(七)

貞操を賣る者……………(八)

『學問』よりも『人格』……………(八)

『永遠』に立脚して……………(九)

生活から見た農村と都會……………(九)

道は通きに在り……………(十)

青年學校と老將軍……………(十)

南 京 蟲……………(十)

人格政治の確立……………(十)

日本は日本だ！……………(十一)

紙 屑 籠……………(十一)

春の淡雪……………(十一)

墓地の櫻……………(十二)

春の思ひ出……………(十二)

『理論』よりも『人情』……………(十二)

『智慧』と『力』……………(二五七)

木堂先生……………(二六一)

千年後の世界……………(二六五)

大山元帥……………(二六九)

松葉杖……………(二七四)

花は霧島！……………(二七九)

革の手袋……………(二八四)

一冊の古本……………(二八九)

『自慙』は禁物……………(二九四)

『親心』と『子心』……………(二九九)

『雪隠詰』になつた話……………(三〇四)

國際的大冷汗……………(三〇八)

服装から心理へ……………(三一〇)

硫黄谷……………(二二五)

ワッペン……………(三〇〇)

『汗』と『氷』……………(三〇四)

『天業』を恢弘せよ……………(三二八)

西瓜畑……………(三三二)

死ぬのは卑怯……………(三三六)

雨……………(三四〇)

僕の『處女作』……………(三四四)

身に沁みた先輩の一言……………(三五三)

『生命』の音……………(三五七)

南洲庵の思出……………(三六一)

世界を支配するもの……………(三六五)

志在君國……………(三六九)

「四本」と「資本」……………(二七五)

人生の冬……………(二八〇)

莊嚴……………(二八四)

一振の短刀……………(二八八)

光は日本の家庭より!……………(二九三)

「義理」と「人情」……………(二九六)

村里興復の途……………(三〇〇)

わしは佐久間だ!……………(三〇四)

庶政一新……………(三〇八)

武士道……………(三一三)

「クサンチビズム」!……………(三一七)

空　　氣　　と　　米……………(三二一)

二つの「金時計」……………(三二六)

夏……………(三三一)

圓　　タ　　ク……………(三三四)

蟻　　地　　獄……………(三三九)

或日の南洲翁……………(三四四)

田園の青年に與ふ……………(三四八)

忙しかつた一日……………(三五三)

解らない講義……………(三五八)

犬　　目　　と　　猫……………(三六三)

「有」と「無」……………(三六七)

四　　海　　一　　家……………(三七二)

絶対に必要だ!……………(三七六)

青森の思ひ出……………(三八〇)

煙　　草……………(三八五)

金よりも心	(三八九)
堪忍袋	(三九三)
柿の思出	(三九七)
第一の寶	(四〇一)
サボチラ	(四〇五)
一月元旦	(四〇九)
第七十議會	(四一三)
克己	(四一八)
嘘をつくくな!	(四二二)
「牛」に學ぶ	(四二七)
「酒」と「私」	(四三三)
滅私奉公	(四三七)
平凡な親切心	(四四一)

日本魂!	(四四四)
南洋の海	(四四〇)
二人の恩人	(四五一)
猿芝居	(四五九)
日本人と眼鏡	(四六四)
心して征け!	(四六九)
大陸の花嫁	(四七四)
十五年振りの臺灣	(四八〇)
猿股を盗まれた話	(四八五)
平靜の心	(四九三)
日向路の旅	(四九九)
萬民一如の協力	(五〇三)
中島知久平論	(五〇七)





多忙な日を送らねばならぬところに、政治家の悲哀が在る。併しそれよりもつと氣になるのは近頃の天候だ。旱天に惱む九州地方、更に大洪水の惨害に見舞はれた北陸地方、廣くもない日本の國でありながら、この相違！ 神様は随分いたづらなものだ。それにしてもこのいたづらは、果して何を意味するであらうか。

東京も長雨に悩んでゐる。夏とは思へぬほどの涼しさ、今日も出入りの洋服屋がやつて来て『夏服の注文が激減しましたが、呉服屋も同様ださうです』とこぼしてゐた。それは兎も角このまゝ進んだならばこの秋は凶作、農村は一體どうなることだらう。

雨の降る日は何となく一種の暗さと、さうして淋しさとを感じる、併しさうした場合に常に僕の心を慰めて呉れるものは、ロングフェローの詩である。今日も雨に閉ぢ籠りながら、久しぶりに、彼の詩集を取り出して、例の好きな『雨の降る日』を讀んで見た。

彼はその詩の最後の一節に於て

『悲しき心を靜かにして怨むを止めよ、

雲の奥には、尙ほ太陽が何時もの通り輝いてゐるではないか、汝の運命は凡ての者の持つ普

通の運命に過ぎなく。

人生は時に雨に降られることもあり、

日によつては、暗く且つ淋しいこともある。』

と歌つてゐる。

人の一生には、照る日もあれば、曇る日もあり、また雨の降る日もある、それがほんたうの人生だ。併し雨の降る日でも、雲の奥では、何時もの通り大きな太陽が休みなく輝いてゐることに氣が付いたならば、そこには暗さもなく、淋しさもない一つの大きな明るい世界が展開されるではないか。

ロングフェローは更に『人生の讚美歌』に於て『死せる過去を葬つて、生ける現在に働けよ』と教へてゐる。過去は逐ふべからず、それは恰も、死兒の齡を數へるの類で實に無益だ。人間は凡てを忘れ、全力を擧げて、たゞ現在に努力しなくてはならぬ。斯くて始めて將來の運命も自から、そこに開け來たるであらう。

我國の現状は、雨に閉ぢ籠つて暗く淋しく暮すべき時ではない。たゞ明日の輝かしい日本を

目標として、雨を冒しつつまっしぐらに進むべき秋である。さうだ、たゞ死力を盡くして現在に働くことのみが、我等の祖國日本を眞に偉大ならしむる所以だ。

——九・八・八——

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く。これは原稿の影写ミスや印刷の粗さによるものと推定される。）

### ヒンデンブルグの死

獨逸の大統領ヒンデンブルグ元帥は八十八の高齡を以て遂に逝去した。彼の死は獨逸のためには一大打撃であり、更に全世界にとりても一大損失である。

去る六日、彼の國葬前儀がベルリンに行はれた。僕は式場より放送せられた新大統領ヒットラーの弔辭を自宅に於て心靜かに聴くことが出来た。

彼の獅子吼は、熱と涙とに満ちた一種の力強い大雄辯であつた。さうして、この雄辯こそは彼が今日の地位を作り上げるまでに、常に用ひ來つた大きな武器の一つであつた。

然り、西部戦線の一兵卒ヒットラーが大宰相の榮冠をかち得るまでには、確に彼の雄辯が役立つてゐる。けれども戦後國歩困難な獨逸の國家を、混亂の中によく今日まで維持し來つたそ

の大きな底力は、大宰相ヒットラーの雄辯にあらずして、寧ろ大統領ヒンデンブルグの偉大なる「人格」そのものであつたことを忘れてはならぬ。

ヒ元帥は人も知る如く、常に一身を祖國に捧げた忠誠無二の大人格者であつた。嘗て一九一一年、陸軍大演習に際し、侵入軍の總司令官として、カイザー親ら率ゐる防禦軍を完膚なきまでに粉碎してしまつた彼は、遂にカイザーの逆鱗に觸れ、豫備に編入せられた。現役を去つた彼は不平一ついはず、ハノーヴァーに靜かな閑日月を送つてゐた。然るに一九一四年に至り、歐洲大戰勃發するや、流石に傲岸不遜なカイザーも、飄然悟るところあり、この國難を救ふの途は、ヒ元帥起用の外になしと考へ、その大人格に信頼し、獨逸の國家を一任せんと欲し、禮を厚うして彼の再起を求めた。

國家非常の場合に際合せば直ちに一死以て國難に殉ずるの覺悟と準備とを日頃、怠らなかつた老將軍は、一度陛下の命に接するや、即刻、汽車程六時間のハノーヴァーから單身駒に鞭打つてベルリンに駆け付け、先づカイザーの檢閲を受け、「この老體尙ほ國家のお役に立つならば……」といつて現役に復し、世界大戰の重き任務に就いた。

この劇的一挿話から考へて見ても、彼が如何に偉大なる人格の所有者であり、熱烈なる愛國心の持主であつたかが解る。従つて僕は、その當時から彼を敬慕してゐた一人であつたが、更に彼が全國民の興望を一身に集め、大統領就任後においては、一層尊敬の念禁じ難きものがあつた。大統領としての彼が、凡てを知りぬいてゐながら、たゞ黙々として、あの老軀に鞭打ち、明日の獨逸を建設すべく死の最期まで働きつづけて來たその偉大さ！そこに我等は「無言の大雄辯」と「無比の大人格」とを發見するではないか。

「雄辯は銀であり、沈黙は金である」。ヒンデンブルグ亡き後の獨逸は、名實共にヒットラーの獨壇場だ。ナチス獨裁の黄金時代だ否銀世界だ。……これからの獨逸には依然としてヒットラーの銀色を帯びた雄辯は聴くことが出來よう。併しこれまで彼の壇上に立つ時、常にその背後に建て廻されたあの立派な「金屏風」はヒンデンブルグの死と共に演壇から永久に取去られてしまつた。さうだ、ヒンデンブルグのあの偉大なる人格は再び見ることは出來ない。

果して獨逸はこれでよいのか、多難なる獨逸の前途よ！

## 國際危局突破の用意

明年、明後年に迫つた國際危局！果して國民にこの危局突破の用意が出来てゐるだらうか。南洲遺訓に「正道を踏み、國を以て斃るゝの精神なくば、外國交際は全かるべからず。彼の強大に畏縮し、圓滑を主として、曲げて彼の意に順從する時は輕侮を招き、好親却つて破れ、終に彼の制を受くるに至らん」とある。

過ぐるワシントン及ロンドン兩軍縮會議に際し、この大精神が足らなかつたばかりに、今や我國は一九三五、六年の國際危局に直面してゐるのだ。

その昔—六百五十餘年前—元寇役に、小國日本が、大國元の大軍を撃滅したのは、決して「神風」のみの力ではなかつた。否、寧ろその主因は、全國民、殊に執權時宗の熱烈火の如き

愛國の「意氣」にあつた。あの場合、青年政治家時宗が、元の強大に畏縮し、圓滑を主として曲て彼の意に順從したとしたならばあの大國難はなくて済んだかも知れない。併しその代りに我國は「彼の制を受くる」の恥辱を敢てし、我等の尊い國史に永久拭ふことの出来ない大きな汚點を印するに至つたことであらう。

歴史は繰返すといふ。故に私達は時宗の「正道を踏み、國を以て斃るゝの大精神」に救はれた祖國の歴史を深く顧み、今日の難局に處するの覺悟がなくてはならぬ。

元寇の役は確かに我國最初の大國難であつた。さうして、この大國難が、執權時宗によつて救はれたことも事實である。併しあの國難一掃の功績を時宗一人に歸するのは穩當でない。即ちあの大捷は總ての利害を超越し、國を擧げて一意國難に越いた、全國民の協力によつたものである。

當時の國情は、我國の全時代を通じて、最も政治的統一の完成された時であつた。國民精神の統一が完成し、命令一下、國を擧げて國難に赴くの準備が立派に出來上つてゐた時であつた。即ち「舉國一致」團結の實を擧ぐるに、最適の時であつた、若しあの國難が、國內麻の如く亂

れ國家を犠牲に供するも、尙ほ且つ、自己榮達のため鬭争を續けたといふ、戰國時代に起きたとしたならば、恐らく、あれだけの大捷は收め得なかつたであらう。

「學國一致！」國難打開の途はこれ以外にはない。

明治維新の目的は、日本の王政復古であり、政治的統一であつた。しかるに昭和維新は、東洋和平の確立であり、全世界の平和的大殿堂の建立である。而して國家はこの大使命達成に必要な國策遂行の爲め、全國民に對し「學國一致」を要求してゐるのだ。

今日の日本國民に足らざるものは、「知慧」でも「學問」でも「策」でも「金」でもない。それは實に國民の「元氣」であり「意氣」であり「氣魄」である。否。「正道を踏み、國を以て斃るゝの大精神」である。これなきが故に、ワシントン會議に敗れ、ロンドン條約にも負けただのだ。

來年に迫る國際危局！これが突破の途は、たゞ一つ、全國民が「正道を踏み、國を以て斃るゝの大精神」に目醒めることであり「學國一致、國難に赴く覺悟」を決めることだ。

### 角箱に丸杓子

僕は決して「教育萬能論者」ではない。併し「國難打開の第一歩は教育から」といふのが、僕日頃の主張である。

故に僕は文部省入りと同時に、教育の制度内容に亘り、これが根本的革新の必要を主張し、遂に教育調査部の新設を見るに至つた。爾來文部省は熱心にこれが調査立案に従事してゐるが未だその成案を見ざるに、はやくも僕は文部省を去ることになつた。併しこの事業は、新しい當局の手に依つて必ず完成せらるゝであらうことを期待してゐる。

我國の現行教育制度には、その形態と内容とに於て、多くの缺陷がある。即ち徒らに形式に流れ、知識の注入に偏し、大切な人格の陶冶がお留守になつてゐるが如き、その一つであるが、

就中劃一主義の弊はその最たるものである。義務教育は、無論全國民に對して一切平等でなければならぬ。そこには貧富の區別もなく、地方的差別もないのが原則だ。併し程度を超えた劃一主義に弊害の伴ふのは當然であつて我國の教育の現状が即ちそれである。

湯淺新兵衛元禎選「吉備烈公遺事」中に政治の要に關する池田光政公と板倉勝重との問答がある。今左にその一節を摘録して見よう。

公十四五計りの御時にや板倉伊賀守勝重に「國民を治め申さんには如何心得候べき」と問はせ給ふ。勝重承つて「京都商賣の輩の訴を判斷のみに年月を経て、國政を行ふ事はわきまへ知らず」と云はれしかば、公重ねて「京都所司代の譽世に高くおはす、必ず國を治むる事は先務あるべし」と語らせ給ふ。勝重「さらば可申候、角なる箱に味噌を入れて丸き杓子にて取るべきやうに計ひ給はん事然るべからん」と答へ申さるれば、公久敷思惟の後「心得がたく候、陰の方行きとよきがたきをば如何し候べき」と仰せ有りければ、勝重「其事に候、東照宮に仕へ奉り、あまたの智謀勇才ありと稱せらるゝ諸將をも見申候へ共、公のごとく年わかくして國事に盡させ給ふ人は今日初めて知りて、驚き候あまり、かく申候ひぬ。公の明敏

必ず國中を隅々迄昇をもちたる様にと思召ならん、大國は左はならぬものと承り傳へて只今のごとく申つれ果して御不審の候ひき國事は寛ならされば、人心を得がたき事にて候」と勝重落涙せられたり。

性急深癖な日本人は、兎もすれば、重箱の角を楊子でほじくる。この缺點から教育制度の劃一主義も生れ出でたのだ。「國中を隅々迄昇を盛りたるやう」にし、日本全國を東京を中心として、恰も碁盤の目の様に千遍一律に同じ大きさの目盛をしてゐる様な現在の教育制度を以てして、どうして實生活役に立つやうな國民教育が出来るものか。都市には都市の尺度があり、農村には農村の尺度がある、従つてそれ／＼の尺度を用ゐて目盛を行ふことによつてのみ、眞の人間教育は出来るのだ。僕が常に「教育を地方に還せ」と主張する所以のものも、實はそこにある。

「角なる箱に味噌を入れて、丸き杓子にて取るべきやうに計ふ」こそ、眞の教育ではなからうか。

## くわんじん橋

名もなき野邊の花一輪でさへ、我等に無限の眞理を教へる。故に宇宙の森羅萬象は、悉く我等の師表である。

明治二十七年の春三月、自分は郷里財部の小學校を卒へ、農學を志して上京することになった。出發に先だち、祖母や伯父母達に連れられて一週目を日當山温泉に過した、生れて初めての湯治であつたから、自分に取りては悉く物珍らしきことのみであつた。殊に釣上手な伯父が毎日新川に糸を垂れてゐたのが今だにはつきり記憶に残つてゐる。

その頃清水村にゐた姉の濱子がよくやつて來ては何かと世話をして呉れた。時には、姪の久子や艶子もやつて來た。さうして田圃一面に美しく咲いてゐる「げんげ」の花を摘んでは遊び

興じたこともあつた。

明日はいよいよ財部に歸るといふ日の夕方であつた。自分は姉の歸りを送つて温泉宿を出た。さうして新川に沿うて下ること約二町余「くわんじん橋」のたもとまで來ると姉は立ち止まつた、さうして言つた。

「いよいよ別れの日が來た、今日は亡き母に成り代つて言つて聽すことがある」……姉の眼は露を帯びてゐた……「お前が今度東京に行くのに就ては、世間色々の噂がある。中には、十四の子供をたつた一人で東京にやる親の氣が知れぬ。どうせ都の風に吹かれて道樂者になつて歸る位が關の山だらう！ さういつてけなす人さへあると聞く。此噂が當るか當らぬか、それはお前の心掛け一つだ。萬一學業成らずして空しく歸つて來るやうなことがあつたなら、この姉が一步も足を門内に踏み入れさせませぬぞ」……姉は嚴として強く言ひ放つた。併し彼女の女の頬には熱い涙が止めどもなく流れてゐた。

斯くて姉は後をふりかへりく橋を渡つて行つた。自分は姉の姿が夕靄に包まれて見えなくなるまで、その後姿を見守つた。さうして自分の胸は感激の涙で一杯になつた。



自分が父に送られて上京の途に就いたのはそれから二週間の後であつた。爾來四十年の今日まで、或は東京に、札幌に、臺灣に、ベルリンその他海外各地に、幾多の學者先輩、偉人乃至大自然に學ばぬ日とては一日もない。併し忘れ難きはあの日の姉の言葉であり、教訓である。

自分の姉は何等學校教育は受けてゐなかつた。若し彼の女に少しでも教養があつたとしたら、それは家庭教育であり「人間道」を目標とした訓育である。而も無學な姉が自分に大きな刺戟と感化とを與へ一生拭ひ去ることの出来ない大きな力を打込んで呉れたのは何によるだらう。それはいふまでもなく、家庭愛であり、母性愛である。——さうだベスタロッチも教育の源泉は母性愛であり、家庭愛であることを説いてゐるではないか。

「くわんじん橋」は今も昔のまゝに残つてゐる、さうしてそれが自分に取つては思出の種である。併し姉はもうこの世の人ではない。

さげに果無きは人生、尊きは教訓！

——九・九・五——

### 苦學の青年

大正十四年の春、僕は臺灣總督府在任中に完成してあつた「植民政策と民族心理」を刊行することにした。そこで原稿の淨書を必要としたが、本職の筆耕屋に出すよりは、苦學生に少しでも所得あらしむることがよいと考へ、東京帝大の共濟會に學資に乏しい學生三名の推薦方を依頼した。

僕の要求により推薦して來た學生のうちでTといふ青年があつた。原稿を三等分して渡したのであつたがTはその中間部を擔任することになつた。而もこのT青年はなか／＼の努力家だと思つて、イの一番に淨書を完成して僕を訪問した。そこで僕はそれに對する相當の報酬を支拂つた、然るにその青年はいつた。

「先生、僕は今度程悲哀を感じたことはありません。これが翻譯か何かであれば自分の能力に對する報酬を受けるのであるから心に悩みを感じませぬが筆耕と來てはたゞの勞働です。而も原稿の頭と尻尾とがないのです。全體としての先生の意見をつかみ得ないので、實に馬鹿々々しい努力でした。」

僕はこの言を聽いて、實にすまないことをしたと思つた。さうして

「それは氣の毒であつた。少しでも學資に不自由な青年達を援助しようと思つたのであつたが、君の自尊心を傷つけてすまなかつた。」

と陳謝した。すると青年は更に

「僕は愛知縣の者で苦學生です。名古屋の中學と高等學校とを苦學しながら卒業、本年帝大の法學部に入學しました。これからの三年間は學問の研究をしなければなりません。従つて從來の如くに苦學の時間があります。幸ひ親類に金持がありますから學資を借り度いと思ひますが、先生如何なものでせう？」  
といつた。

僕が札幌農學校を卒業して社會に一步を踏み出す時、佐藤校長（今の男爵）から「借金は出世の邪魔になるからしないやうに、さうして農學の立場を踏み外さないやうに」と教へられたことが非常に爲めになつたことを話し、出来るならば親類から金の援助を受けないで飽くまで苦學を續行し給へと答へた。

翌日彼は書面を以て昨日の非禮を謝し「頭と尻尾の缺けた原稿の筆耕がつまらないといつたのは、丁度大家の描いた龍の繪を見て、この繪は頭と尻尾が雲に隠れ、胴ばかりで駄目だといふのと同じであるが、ほんたうに偉い人間ならば胴を見て、龍全體の勢ひを想像し、心の中に完全な龍を描くべきである。そこに氣の付かなかつた自分の不明を暴露し、あの様な失言をしたのに顔色一つ變へもせず、失言を靜かに教へて下さつた先生に心から謝罪します。更に八年間獨立獨行苦學で押し通して來た自分の誇りを正に汚さんとしてゐたところを救つて下さつた先生の大恩をほんたうに感謝します」といつて來た。

それ以來、この青年は僕と親交を續け何かと相談に來た。僕も最善の援助を彼に與へたが一度でも金に關する相談をしたことがなかつた。苦學三年、立派に大學を卒業し、更に高文の試

験にも司法、行政共に合格した。

次に來るべき問題は就職であつたが、それも僕の骨折で、臺灣總督府に採用になり、今では立派な高等官となり、或一部の長として眞面目にその職務を果し、向上發展の一路を辿つてゐる。

昔も今も苦學は容易でない。殊に獨立獨行の大精神に乏しい近頃の學生にはT青年の様な人物が至つて少い。徒に他力本願に生きんとする青年の多い今の世に賞揚すべき青年の一人ではないか。

一九・九・一三

### 秋の蟲の音

秋が來た。庭らしい庭もないやうな僕のうちでさへ、蟲の音がしげくなつて來た。秋の蟲の音！それが僕達にどれだけ尊い或物を與へて呉れることだらう。

大都會の眞中で、寝ながら靜かに、蟲の音を聴くことの出来る日本の國は幸福である。僕はこの意味に於て日本人としてこの國に生れ得たことのありがたさを感じせずにはゐられない。それにしても思ひ出されるのは、新渡戸先生のことである。

僕が文部政務次官拜命のことをアメリカで知つた先生は、ニューヨークから遙かに書を寄せて僕の任官を悦んで呉れた。更に昨春任を終へて歸朝せらるゝや僕を午餐に招いて心から祝賀の意を表せられた。

その際のことである。先生は更に近く太平洋學術會議の爲めカナダに行くが、それが済めばアメリカに行くことになる。さうしてカリフォルニア大學が、これから五年ばかりの間、日本の事情を講義して呉れといふから引受けるかも知れぬと話された。併し僕はそれには賛成し得なかつた。

「自分の年のことも御考へにならねばなりません。いかに先生の使命が、太平洋の橋たることにあるとしても、身體に障るやうなことがあつてはつりませぬから」といつた。先生は「五年間行きつ切りといふ譯ではないし、それに健康も別に悪いとは思はないから、出来るだけ、國家に御奉公するつもりだ」といはれた。

先生がカリフォルニア大學の要求に應ずる決心をしてゐられたことは、この會話から見ても察することが出来る。先生は更に「アメリカ人の日本に對する誤解は餘程解けて來た。併し今後尙ほ一段の努力を必要とする。それにしても、何とかして秋の蟲の音をアメリカ人に聴かしてやり度いものだ。彼等が蟲の音を聴き、これに關心を持ち、更にそれによつて日本人の氣持を理解することが出来たなら、日米兩國國民の融和の上にとだけ役立つことであらう」といはれた。

秋の蟲の音！ それは日本獨特のものであり、それを聴き、それを樂しみ、それを詩化して行く日本人の氣持をよく理解しない限り、外國人には日本人の心理は、ほんたうに解らないと考へたのが先生であつた。斯くて先生はこの目的を達する爲めの工夫をこらしてゐられたが、僕にも名案があつたら教へて呉れといはれた。この一事から見ても先生が、いかに日米融和の爲め身命を賭して努力してゐられたか解る。

先生はその後間もなくカナダに渡られた。さうして豫定の任務を終るや、病を得て再び起つ能はず、七十二歳を一期として遂に彼の地に客死せられた。従つて「アメリカ人に蟲の音を聴かしてやり度い」との念願は、そのまゝ永久に達せらるゝの目がなくなつてしまつた。

僕は先生の一周忌を近く迎へんとしてゐる。さうして過去を顧み思ひ出づることの多い中にも、「アメリカ人に秋の蟲の音を聴かしてやり度い」と熱心に説かれた先生の言葉が、今も尙ほ僕の耳底に新しく残つてゐる。然るに先生はもうこの世の人ではない。

時は秋だ。さうして蟲の音を聴くにつけ、僕は特に先生を思ひ出さずにはゐられない。

## 伯林の月

今日は陰暦の八月十五日中秋明月の晩である。氣象學者の説によれば、八月十五日を「明月」といふのは支那のことで、我が邦では九月十三夜がほんたうの明月ださうだ。従つて中秋明月といひながら、八月十五夜には無月の場合が多い。然るに本年は颯風一過、都の空は一點の雲だになく眞の明月を見ることが出来た。

この世の中に月はたつた一つしかない。さうしてその一つの月が、世界中の國々をくまなく照してゐるのだ。然るに日本入程月にあこがれ、月に關する詩歌文章を多く有する國民は少い。西洋には星を讚美する詩歌は非常に多いが、月に關するものは至つて少い。我國では星を詠んだ歌や俳句は極めて少いが、月に關するものは非常に多い。そこに私達は國民性の大きな相違

を發見する。

星の光は強く輝かしい。併しその光は何となく小乘的で、利己的な個人主義を表徴してゐるやうな感じがする。然るに月の光は柔かく温かい。さうして、その光は何となく大乘的で普遍的な博愛主義に徹してゐるやうな印象を與へる。星を愛好する西洋人と、月を讚美する日本人との相違も、またそこにあるのだ。

僕はこんなことを考へながら、天空の明月を靜かに眺めてゐた。さうして何時とはなしに、嘗てベルリンで眺めた月のことが頭に浮んで來た。

明治四十三年の秋のことである、東京の妻から頻りに月のよいことを報じて來た。さうしてベルリンでも同じやうにこの月は明るいことだらうと書いてあつた。僕はベルリンに來てから月のことはすっかり忘れてゐた。東京からの音信を読んで、初めて成る程もう秋だ、月のよい時節だなアと考へた。

詩人はロンドンの月を讚美してゐる。あの霧深いロンドンの月でさへ詩であるといふならば、ベルリンの月もきつと讚美に價ひするものがあるだらう。街頭の月！下宿のバルコンか

ら見た月！ かう考へて來るとベルリンの月も確かに詩を思はずものがある。

僕は祖國からの音信に刺戟を受け、こんな冥想に耽りながら何心なくバルコンに出て見た。すると天空には一點の雲だになく、澄み切つた大きな秋の夜が心靜かに下界の街を照してゐた。成る程ベルリンにも月はあつたのだ、何處で見ても美しいのは月だ。何時眺めてもなつかしいのは月だ、妻が東京で寄宿舎の窓に眺むる月も、僕がベルリンで下宿のバルコンから見る月も總て月は一つだ。そのたつた一つの月に満遍なく照されてゐるのが私達の世界だ。

遠く離れて會ひたいときは

月が鏡となればよい

僕はただ獨りこの唄に心を寄せながら、靜かにバルコンの月を眺めた。……併しそれは若かりし日の思出！ 今からもう二十五年も前のことである。

僕は今、家族と共に心靜かにこの明月を賞し、且つ過ぎし日の思出に耽り得ることの幸を感じずにはゐられない。

伯林にひとり相見し月などを

思ひうかべて月をみてあり

併し忘れてならないことは、満月の次に來るものは十六夜の月であることだ。島津日新公はこの點を、いろは歌に於て次の如く戒め私達に「知足」の心得を教へて居られる。この點を少しきを足れりとは知れ満ちぬれば

——九・九・二三——

## 梨と金時計

今から十四、五年も前のことであるが、全国に亘り流行性感冒が盛んにはやつたことがあつた。當時臺北に居住してゐた僕の家庭では最初長男（七つ）、次に長女（五つ）それから家内、女中といふ風に、一家全滅の惨状を呈した。そこで無事なのは僕一人、病人の食事は無論のこと一切萬事世話を見ねばならなかつた。

僕は家庭にあつても朝はパンとコーヒーですますことにしてゐる。従つて最初に全快した長男も、朝はパンですませせてゐた。ところが或朝のこと、病氣が大分よくなつた女の子が俄に御飯が食べたいといひ出した。無論御飯が炊いてないからパンで我慢させようと苦心したが、どうしても承知しない、お仕舞には御飯が食べたいよーと大きな聲で泣き出した。

そこで萬策盡きた僕は、お隣から御飯を一杯貰つて来るに如かずと考へ、長男にその使者を命じた。ところが今度は長男が仲々承知しない。御飯を貰ふのは乞食だ、僕は乞食の眞似をするのはいやだといふのを、無理やりに納得さして貰つて来た一碗の御飯、それを女の子に與へて初めて事なきを得た。

僕はその時、人間が食べたいと思ふ御飯のないとき執るべき手段は、食はずに餓死するか、乞食になるか、さもなければ我に飯を與へよ米を與へよと叫んで起つか、三者その一を出でないのであると思つた。その後間もなく富山縣下に米騒動が起り、それが寺内内閣倒壊の導火線となつた。而もあの騒動が我に米を與へよ飯を與へよと叫んで起つた細君達によつて初まつたことを新聞で讀んだとき、僕は嘗て自分の體驗した飯問題を回顧してあの時の心持だなアと感じた。

更に大正十二年の大震災に際し食糧缺乏の結果、東京市民がいかに苦しんだかは世人周知の事實である。それは九月三日の出来事であつたと記憶する、本所の方から一人の立派な紳士が道を歩いて來た。それと出會つたのが、十二歳位と十歳位の男の子を二人連れのお婆あさん

而もその子供達の手には、それ／＼梨が一つづゝ握られてゐた。それを見つけた件の紳士、梨が欲しくてたまらない。そこでお婆あさんに空腹の旨を訴へ梨と金時計との交換を申込んだ。

お婆さんは氣の毒に思つたのか、それとも金時計が欲しかつたのか、紳士の要求に應じようと思つて子供達に相談した。然るに子供達は一言の下に交換を拒絶した。そこで紳士は顔に失望の色を見せつつ空腹を抱へながら、再びトボ／＼と道を歩いて行つた。

僕はこの新聞記事を読んだときこゝだと思つた。あの場合紳士の金時計は價千金といへども彼の空腹を満たすには何等の價値なきものであつた。即ち食糧缺乏の前には金時計一個が梨一個の價だにしないところに、私達は大きな教訓を發見するではないか。

英人クーパーは、嘗て「人間は高價な宮殿や華麗な着物や、種々の化粧品、それに金さへあれば、いくらでも求め得る贅澤品の數々は無くても生活は出来る。然り立派に生活することが出来る。但し人間は食物無しには生活することが出来ない。パンは生活の根源である、吾人はパンを持つか、然らずんばたゞ死あるのみだ」と論じてゐる。食ふか、死ぬか、人間の進むべき途は、この二つしかないのだ。

旱害、水害、風害、冷害、あらゆる災害に悩まされ大凶作に直面せる我國の農村！ それによる食糧の缺乏！ 私達は總ての者に食を興へるの努力を致さねばならぬ。

——九・一〇・三一——



## 結婚の問題

秋は結婚の季節だ。毎年この季節になると、何處の百貨店でも、結婚衣裳の陳列會を催して綺麗なところを見せて呉れる。併し自分はそれを見るにつけても考へさせられることが少くない。

50

結婚は一生一代の盛儀であるから出来るだけ立派にして遣り度いのが親心だ。併し日本人は一體見え坊である關係から、それが結婚式にも遺憾なく反映してゐる。

結婚式が如何に立派であつても、それがそのまま新家庭に幸福をもたらすわけのものではない。又披露宴がどんなに派手であつてもそれが直ちに本人出世の役に立つ筈のものでもない。要は「身分相應」といふことが何よりも大切だ。

最近、家庭化學研究所が結婚費の年收に對する比率を各國に就て調査したものだといふのが新聞に出てゐた。それによると、年收二千圓の家庭に於てはイギリス、フランス及びドイツが共に一割、アメリカが二割、イタリアが四割更にスペインが七割、ロシアが八割となつてゐるのに、我が日本は十五割乃至二十五割といふ大きな比率を示してゐる。併しそれよりも尙ほ大きなのは、支那の二十五割乃至三十割といふのがあるから驚かざるを得ない。

更に年收一萬圓の家庭に於てはイギリスが八分、フランス及びドイツが一割、アメリカが二割、イタリアが四割、スペインが五割、ロシアが八割であつて、日本は十割乃至二十割、それに支那が三十割といふ比率を示してゐる。

貧乏なくせに、見榮を張りたがる日本人が、年收の十割乃至二十五割を結婚費にかけてゐるのに、金持のイギリス人は僅かに八分乃至一割しかかけてゐない。そこに私達はイギリス人の堅實な經濟生活を窺ひ知ることが出来る。……結婚費の節約、舉式、披露宴の簡易化！我國現下の行詰つた經濟生活の打開は、先づここから出發すべきではないか。併し、それよりもつと大切なことは婚約に至るまでの調査その他に最善を盡すことである。

そこで自分は結婚といへば、直に「馬を買ふ時と、妻を娶る時とは、眼を閉ちて運を天に任せよ」といふイタリーの諺を思ひ出す。さうして更に自分が幼少の頃祖母から聞いた次のやうな話を思ひ出さずにはゐられない。

或横着者の馬喰が穴白の馬を鍋臺で塗りかくして或正直な百姓に賣りつけた。聽て賣買成立の祝宴が開かれた。宴たけなはにして馬喰は、俄に起ち上つて「ぬつた〜はげなきやよいが」と唄ひながら踊つた。すると、何も知らない百姓は手をうちながら「はげてもよい〜」と調子を合せた。

話は極めて簡單である、併し如何にも諷刺に富んだ面白い話ではないか。馬喰口と仲人口！それに乘せられて、馬の買ひそこなひ、婿の選びそこなひ、そして嫁の貰ひそこなひをするものゝ多いのが我國の現状であることを思ふとき、自分は運を天に任せよといふイタリーの諺に共鳴する譯にゆかない。

そこで自分は新しく人生の荒海に船を乗り出さんとしてゐる世の若き人達の將來に幸運ありしむべく「結婚前は刮目して見よ、結婚後は眼を半閉ぢよ」と教へたアメリカの諺を提唱して

やまないものである。

一九・一〇・一〇



## 目黒の秋刀魚

東京は今秋刀魚の季節だ。殊に今年は秋刀魚の大豊漁、築地の魚市場には、毎日平均七十三噸ぐらゐの入荷があり、去る三日の朝などは貨車卅車百五十噸の大量が到着して、市場を占領してしまつたといふことだ。

江戸ツ子が初秋刀魚を賞美したのは遠く元祿の昔からのことだ。當時は十月の末頃になると房州常陸の近海で獲れた本味のすばらしいのが遣入つて来て、江戸の人気を呼び、一時的ではあるが景氣もよくなつたといふ程、豪勢なものであつたさうだ。

それにしても、自分は秋刀魚の季節になると、何時も「目黒の秋刀魚」といふ話を思ひ出す。たしか三代將軍家光であつたと思ふが、或日鷹狩に出かけた。何でも目黒邊でお腹が空いた

といふので或農家で食事をすることになつた。その際百姓はあり合せの「秋刀魚」を眞黒に焼いて差上げた。ところがそれが馬鹿に美味かつたので、將軍は「一體これは何んだ」とたづねた。無論「これは秋刀魚といふもので御座います」と答へたことはいふまでもない。將軍江戸城に歸還の後も、その味が忘れられず「秋刀魚が喰べ度い」との御意。そこで大膳職では、日本橋の魚河岸から、特に選り抜いた美事な奴を差上げたが一向御満足にならない。さうして「秋刀魚は目黒に限る」といつて「目黒の秋刀魚」を所望せられたといふ話。

目黒の百姓家で黒こげになつた秋刀魚の方が、何で江戸城奥深きところ、美事な食膳に上つた秋刀魚よりも美味しいものか。而も將軍が「秋刀魚は目黒に限る」と讚美し、それにあこがれたのは、あの場合、一日を狩り暮した將軍のお腹がすつかり空いてゐたからだ。「空腹の前にはまずいものがない」うんと働いて、うんと腹を空かせ、何でも美味しく食ふ！そこに私達はほんたうに楽しい人生を發見するのだ。さうして、働かぬ將軍よりも働く百姓の方が遙かに多くの幸福を感じるではないか。

一體秋刀魚は夏の間は千島方面にゐるが、秋風の吹き初むる頃になると、親潮に沿うて南下

し、十月半には、九十九里の沖にかゝり、外房州に廻るのが十月下旬、その頃が油ののり切つた時が一番味もよい。

然るに漁師は初物を人よりも真先に得んが爲め、そこまで来るのを待ち切れず、遠く北方まで出漁する。殊に石油發動機や、ディーゼル・エンジンを使ふ大型漁船が出来てからは、一層遠方まで出かけ、八月十日頃から初物を獲るやうになつた。

元來日本人は初物喰ひが好きだ。殊に氣の早い江戸ツ子にその癖がある。併し凡て走りまづくて値が高い。故にこれ程不経済なものはない。而も尙ほ且つそれを好んで賞美するところに日本人の心意氣があるといふならそれもよからう。但し斯くの如きは、國家的に見て不経済であり、漁業経済の上から考へても不得策である。そこで農林省は、昨昭和八年八月省令を以て、毎年九月二十日までを秋刀魚の禁漁期と定め、稚魚の保護に努めることになつた。

自分は秋刀魚が好きだ。しかし本年はまだ、これは美味いと思ふ程のものにぶつつからない。従つて敢て將軍様の眞似をする譯ではないが目黒の秋刀魚が欲いなアと思ふ事がないでもない。それにしても、中學時代には、秋になると「さんま、さんま、さんまア！」と勇ましい聲で

呼び賣りする、いなせな肴屋の若衆をよく街頭に見受けたものであつた。然るに今では、それさへ殆ど見ることが出来ない、これも時勢の進歩だといへば、それまでだが、併し自分は東京の街から、さうした江戸氣分がだん／＼消えて行くのを心さびしく感ずる。

—九・一〇・一三—

日露の戦役終局を告げ、我が海軍の將星が東京に凱旋した時のことである。折から札幌農學校を出たばかりの僕は土橋附近に堵列してそれを迎へた。無論自動車のない當時のことであるから、その行列は馬車であつた。

僕は感激の眼を光らせながら、次から次に過ぎ行く車上の將軍達を熱心に見まもつた。さうして今尙ほ深く僕の腦裡に刻みつけられて忘るゝことの出来ないのは、その際我が薩州出身の東郷、上村兩提督より受けた強い印象である。

車上俗も意氣天を衝くが如き態度を持し、舉手以て兩側の市民に満遍なく答禮せられたのが、我が上村將軍であつた。僕はその時矢張り上村將軍は英雄だ、……さうして、その眼底には確

かに涙を持つてゐる將軍だと思つた。

將軍が第二艦隊司令長官としてウラジオ艦隊を撃沈した際、敵を殺すことのみが戦争の目的ではない、戦鬪力を失つた敵兵は一人でも多く救へと命じたのは、即ちその貴い涙から出發した武士の情に過ぎないのだと思つた。

然るに我が東郷提督は一見好々爺の如き態度であつた。さうして車上前かどみになつた提督は鞠躬如として物靜かに舉手の禮を續けられた。……あの沈着、あの謙遜、あの自信ある風貌……あれが日本海に敵の全艦隊を遺骸なく撃滅したのだと考へた。さうして私達はそこに神を信じ神を恐れ、たゞ「まこと」に生きんとする聖將東郷提督を發見することが出来る。

それから約三十年を経過した昭和七年の六月、僕は文部政務次官拜命のお禮挨拶の爲め元帥邸を訪問した。さうして、元帥から我がことの様喜んでいたが、「思想問題のやかましい今日、教育のことは特に大切だから眞剣に御奉公せよ」と激動の言葉があつた。

その際、僕は國教のある國は弊害もあるが一面には、國民思想の統一上都合のよいこともある、併し信仰の自由を許された我が國にはそれが無い。そこに都合のよいこともあるが、同時

に不便を感じることも少くないやうに思ふ旨を述べ、何かこの缺點を補ふ方法はないものでせうかとおつたねした。

すると、元帥は何時もの通り、温かみのある静かな言葉で、「イヤ、宗教の相違は、そんなに心配しなくてもよい。神道、佛教、キリスト教と名稱は違つても、それは凡て人間最終の目的たる「まこと」に達する一つの道程に過ぎない。登り行く道は、それ／＼分れてゐても、到達すべき最終の地點は一つだ。……「まこと」の宿る高嶺の他にはない。人間に大切なことはその最終の地點たる「まこと」に到達することだ。人間に「まこと」さへあれば信仰の差別等問題でない。教育の目標もそこにおかねばならぬ」と訓された。

僕はこれを聽いて矢張り元帥は偉いと考へた、さうして自分の修養の足らざるを恥ぢた。宗教を超越して「まこと」に生きんとする東郷元帥、そこに私達は「眞に神を信じ、神を恐るる大偉人東郷元帥」を發見する。

元帥の薨去に方り、長くも聖上陛下より賜はつた誄の御詞の劈頭に「至誠神に通じ」と仰せられたことは、いかばかりか元帥在天の英靈を感激せしめたことであらう。さうして私達は

「誠」に徹した、神の如き東郷元帥亡き後の祖國を顧みて、特に心のさびしさを感ずる。

今日の日本に缺けたるものがありとすれば、それは「金」でもなく、また「智恵」でもないそれはたゞ「まこと」だ。……日本の教育よ「誠」なき國民に先づ「誠」を興へよ！

九・一〇・二三——

## 出世の秘訣

僕が札幌農學校を卒業したのは、明治三十八年の七月、同窓會は僕等新卒業生の爲め祝賀の會を開いて呉れた。その席上先輩の中から、T氏は官界の代表者として、更にO氏は實業家を代表しての訓話があつた。

T氏は官吏としての心得は「その椅子に甘んじて不平を言はぬことだ」と教へ、O氏は「成功談」を一席試みられた。併しどちらも僕の氣にはいらなかつた。

歸て新卒業生を代表して謝辭を述べる段になると、その御鉢が僕に廻つて來た。僕は止むなく起つた、さうして無遠慮に述べた。

「T先輩は單にその位地に甘んぜよと教へて、我等に向上發展の道を少しも説いて呉れな

つた、それが僕には不満だ。更にO先輩は盛んに成功を説かれた、併し成功は目的でなく結果だ。我等が札幌に學んだのは、成功を目標としたのではない、我等は成功を眼中におかずた。國家民人の爲め眞剣に努力すればそれで足りるのだ」といふのが、僕の述べた挨拶の要旨であつた。今から考へて見るに、僕も随分若かつたのだと思はないでもないが、併し今日といへどもこの主張には何等變るところがない。

豊太閤は或意味に於ては日本一の成功者であつた。その太閤さんに或時黒田如水が「立身出世の秘訣」をたづねた、すると秀吉は「別に立身出世の秘訣などはない、たゞ「分」に安んじて懸命に努力したまふのことだ、過去は追はず、未來を憂へず、その日の仕事を一心不乱にやつたまふのことだ」と答へた。

一介の草履取り木下藤吉郎が天下の太閤秀吉になるまでには色々の身分階級を踏んで來た。彼は決して一足飛びに太閤様になつたのではない、而もその間、常にその分に安んじ、その分を立派に生かして行くことに懸命の努力をしたところに立身出世の秘訣があるのだ、併し同時に彼が常に向上の意氣に燃えてゐたことを忘れてはならぬ。

嘗て或人が上原元帥に「今日の地位を得られるまでの處世術を教へて貰ひたい」と質ねた。すると元帥は「何もないが、併し上原は陸軍少尉の時は、日本で一番役立つ少尉にならうと努力した。中尉、大尉になつても、また中將、大將になつても、その通りの精神で懸命に努力した、たゞそれ丈けのことだ」と答へられたと聞いた。

私達はそこにも「分」に安んじて、努力するの大精神を發見する。元帥は死の最後まで、勉強せられ努力せられた、死ぬまで新知識を求め修養につとめられたのが元帥の凡てであることを思ふとき、私達は元帥に教へられるところが多い。

新渡戸先生は「一日一訓」の中に「人はたゞ、その日／＼の義務を完了することにて足る、一日の業は百年の基礎をも作るべし、一粒の米に萬石の約束あるが如し」と述べ、「今日を限り今日を限りの命ぞと思ひて今日の勤めをばせよ」といふ歌を引用してその日の努力を説いて居られる。

私達は、徒らに空想を描き成功を夢みつつも何等その日の務めに努力しない世の不心得者を絶対に排撃する。無論私達の志は常に遠大でなければならぬ。併しその遠大な志を遂げんが爲

めにはたゞ現在に死力を盡して働くことが必要なんだ。

一兵卒の仕事を興へられたら、一兵卒として立派にその任務を果し、更に大將の位置に置かれた場合には完全にその任務を全うし得る丈けの、修養と實力と決心と用意とを常に持つてゐることが人間には必要だ。重ねていふ「成功は目的にあらずして結果だ」、私達はたゞ今日に努力すればよいのだ。さうだ「永遠に立脚して刹那に努力する人」こそ眞の人間だ。



## 鐘の音

雨乞ひのかね打ちならす村人のこゝろにそゞく我が涙かな

この歌はさきに早害調査の爲め歸縣の際出来た僕の駄作である。老幼男女、村を擧げての努力、晝夜を分たず、打鳴らすあの鉦の音！そこには一種の哀調を帯びた悲痛の響が聴ゆるではないか。僕は涙なくしてはそれを聴くことが出来なかつた。併しこの涙こそは聽て農村救済の強き力を我等に與へて呉れるのだと考へながら、次から次に村を巡り歩いた。さうして嘗て、ただ一人故郷の野路を歩きながら聴いた「晚鐘」のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。

秋更けて

野邊にや

白菊黄菊のさかり

咲いた野菊に

さびしい姿

偲ぶ旅路や

暮の鐘！

南洲翁の五十年祭が盛大に行はれた昭和二年の秋更けて……丁度今頃であつた……僕は爛喉郡の村々を巡つた。或日のこと野邊に咲く野菊の淋しい姿を眺めて、もう秋も更けたのだなと思ひながら、冥想に耽つてゐると、どこかの寺でつくのか、夕暮の鐘が静かな高原の村々に鳴り響いて來た。

秋はさびしい。その淋しい秋の野に夕暮告ぐる鐘の音を聴いた僕は、たゞ何となく自己の生活を反省して、大きな感激を覚えながら、更に深き冥想を續けてみた。

「鐘の音！」といへば、僕は直に「ミレーの晚鐘」として世に知られた、あの有名なミレーの名畫「アンゼラスの鐘」を思ひ出す。

年の若い男女二人の農夫！ 無論それは夫婦である。一日を仲よく野良に働き暮して、今正に我が家に歸り行かんとする刹那、黄昏告ぐるアンゼラスの鐘が夕靄に溶け込んで流れて來た。若者は肩から鍬を下し、その上に両手をのせて、靜かに首をうな垂れた。それと差し向ひに、両手を組み、同じく首をうな垂れて、深き祈に落ちてゐるのが彼の若き妻である。さうしてそこには「感謝」と「法悦」とに泡満した姿以外には何者も發見することが出來ない。

僕はこの繪が好きだ。さうしてこの繪を見る度にあゝいつたやうな敬虔な氣持で、聖らかな農村生活を營み得る人生の貴さを感謝せずにはゐられない。

更に「鐘の音」といへば、僕は京都の健仁寺と、あの有名な軍歌「こゝはお國を何百里……」の作者眞下飛泉を思ひ出す。

眞下は僕の家の直ぐ上の姉の連れ合である。彼は教育家であり、同時に詩人であつた。彼が健仁寺の西來院に住つてゐた頃、僕はよく彼の家に泊つた。さうして朝に夕に「祇園精舎の鐘の音」を聴きながら、彼と共に靜かに人生を語り合つた。

彼の家内の一つ上の姉の夫が、日露の戦役に出征、負傷のため内地に歸還の際、戦地の實狀

を審さに物語つて呉れた、その話にヒントを得たのが「こゝはお國を何百里……」の軍歌であると彼は話してゐた。

彼はその後知恩院山内に移り住んでゐたが、今から八年前の十月、四十八歳を一期として遂に死んでしまつた。さうして彼の妻もまたその後久しからずして、彼の後を追うて逝いた。

斯くて「こゝはお國を何百里……」の記念碑は、彼の教へ子達の手によつて、彼と因縁深き知恩院の境内に夙くも建立せられた。ところが更に彼の郷里の出身小學校にも先月十六日、彼の命日を期して貴い記念碑の除幕式が行はれた。

眞下飛泉は死んだ。併し彼の藝術的作品は、國家の生命と共に永久不滅である。……  
ゲーテもいつたやうに、げに短きは人生！ 永きは藝術！

## 病める兒の涙

人間にとりては自分の生活そのものが直ちに大きな教訓である。嬉しい日、悲しい日、楽しい日、苦しい日、それ等のすべてが、そのまま教訓であるところに人生の意義がある。

昨年十一月十六日は恩師新渡戸先生の遺骨を東京に迎へた日であり、同時に僕の二男が腸チブスのため赤十字社病院に入院した日であつた。九日の朝から高熱に襲はれた子供の病状にチブスの疑ひありと主治醫はいつた。それに氣をひかれながらも、横濱に、一の關に、新潟に、實業補習教育四十周年記念の講演を續け、東京に歸つて來たのが十六日の朝、病氣は既にチブスと決定してゐた。そこで、その日の正午頃には入院さしてしまつた。

横濱まで恩師の遺骨を迎ひに行く計畫も棒に振つてしまつて、家族と共に病院に詰めた。院長の診断によると、病勢重しといふのだから、凡てを運命だと諦めるより他に途はなかつた。

家内は、昨晚チブスと決定した病兒が、も一度母といつしよに寝度いといふのを、きいてやらなかつたことを悲しんだ。さうして子供が、自分は「東風吹かばにほひよこせよ梅花の花、あゝるじなしとて春な忘れそ」といふ道眞公の歌と「われこそは新島守よ沖の海の荒き浪風心して吹け」といふ後鳥羽上皇の御製が好きだから書きつけて置いて呉れといつたといふので、もうこのまゝ無事では歸れないのではないかといつて泣いた。併しこれも母としては無理のない「愛の歎き」だと思つた。

家内は母性愛のすべてを傾け盡して日夜看護に努めた。さうして、それがまた病兒にとつては大きな力であつた。ところが、その母さへ一ヶ月目には流感のために倒れてしまつた。

病兒は醫者の教へをよく守つた。さうして、たゞ黙々として靜かに病魔と闘ひ續けた。恢復期にはいつてからは盛んに空腹を訴へた、併し彼は「何か欲しい」とはたゞの一度も口にしなかつた。

或日彼の頬には涙が流れてゐた。それに氣のついた姉は「何が悲しいの」とたづねた。彼は「お姉さまにはお腹の空いたこの苦しみは分らないよ」といつた。併しそれでも彼は「何か食べ度い」とはいはなかつた。

チブスに一番大切なのは恢復期に於ける空腹に打ち勝つことだ。故に僕はこの點に就いて深く病兒を戒めた。……「人の出来ないことをよく我慢するのが、ほんとの英雄だ。お前が英雄になり得るかどうか、俺はそれを見てゐるのだ」と強くいつてゐた僕も、この「病兒の涙」を聽いては、自ら涙なきを得なかつた。

幸に重症であつた病兒も入院三ヶ月にして、漸く退院が出来た。さうして「僕はお蔭で學校は一年遅れた。併し英雄の試験にはパスした」と瘦せコブシを固く握りしめながら威張つてゐた。

併し子供の病氣で大きな教訓を得たのは父親たる僕自身であつた。お恥しい話だが、今までは傳染病室の見舞には、一種心の不安を感じたものだ。然るにこの度は少しの不安も恐怖心もなくなつた。自分の胸は「親心」で一杯になつてゐた。

傳染豫防の爲めの「防護衣」でさへこの場合には邪魔物に感じた。僕は病兒を看護しながら何遍も考へさせられた。さうして自分の足りない修養を恥しく思つた。

チブス患者は、それが他人だらうと身内だらうと凡て一つであつて、傳染力に變りのあらう筈がない。たゞ變つてゐるのは、それに對する自分の氣持だけだ。

傳染病には必ず防護衣が必要だ。併し自分の心までもそれに妨げられてはならぬ。防護衣を着ながらそれを忘れ赤裸々になつてかゝるところに、人間のほんたうの「誠」は現はれるのだ。さうして、そこには「身内」もなければ「他人」もない筈だ。——子供の病氣による苦惱の中に、自ら求め得たこの「悟！」それは實に尊いものではないか。

今日は丁度その一周年に當る。さうして健康全く舊に復した子供の朗かな顔を見るとき、一年前のことは丸で夢の如うだ。

## 哲人出てよ

昭和三年の八月一日、床次先生が突如として民政黨を飛び出された時のことである。舊政友本黨系の人達が、その去就を決すべく論議を重ねたことがあつた。

その際、N氏は「床次氏今回の行動は英雄的であつて、自分達にはその眞意を解することが出来ない。然るに政黨政治は大衆政治であり、デモクラシーは凡人の政治である、大衆には英雄の心を理解するの力なく、凡人には偉人の行動を玩味するだけの能力がない。しかし自分は飽くまでも、大衆と共に政黨政治家として、デモクラシーの發達に貢献せんと欲するが故に遺憾ながら民政黨に残留する」といつた。

あの時の床次先生の行動が英雄的であつたかどうか僕には分らない。併し先生が常に國家を

念とする政治家であることだけは確かだ。それは兎に角N氏の言に従へば、政黨政治には一人の英雄だに必要なしといふ結論になる、併し僕はそれには賛成出来ない。

政黨政治の缺點は、その政治がともすれば衆愚に陥り低調に墮するの危険があることだ。ましてそこに一人の英雄だにない場合に於ては尙更のことである。眞のデモクラシーは卓越した大人物が中心となつて、絶えず輿論を察し、大衆を指導して誤りなきを得たる時、始めてその眞價を發揮することが出来る。現に政黨政治の元祖たるイギリスに於て見ても、グラッドストーン及ヂスレリーの如き偉人が相對立して政黨を率ゐた當時が、正に政黨政治の黄金時代ではなかつたか。……さうして我國現下の政治的行詰りは、結局黨界に偉人なきの結果ではないか。出でよ英雄、黨界革新の爲めに！

第二次若槻内閣成立の直後、僕はさきに重要任務を帯びてイギリスに使用した某先輩を訪ねたことがあつた。その際先輩が「マクドナルド氏の立派な政治家であること」を讚美されたので「どんな點が偉いですか」と質ねた。すると先輩は「なか／＼修養が出来てゐる」といはれた。更に僕が「つまり哲人政治家でせう」と云つたところ「その通りだ」とのことであつた。そこ

で僕は「我國でも、さうした哲人政治家が出なくちゃ駄目ですね」といつて別れた。

間もなくマクドナルドは内閣を投出してしまった。イギリスの行詰つた財政打開の爲には、労働者に對する國家の負擔を軽減するより他に途なしと決心した彼は、遂にその計畫の斷行を表明した。然るに彼の率ゐる労働黨はまづかうからこれに反對した。

然るに彼は「労働者を救ふ前に、全國民を救はねばならぬ、殊に國家あつての政黨だ。予はイギリスの國家を犠牲にしてまでも、自己の政黨に殉する譯にはゆかぬ」といつて、遂に労働黨を去つた。

多年血の滲むやうな惡戰苦闘を續けて、漸く第一黨を勝ち得た彼ではないか。而も彼は國家の爲めには、その貴い政黨をも弊履の如く捨て、顧みなかつた。更に全國民の爲には、多年苦樂を共にして來た同志とも涙を呑んで袖を分つた。

而も國家は遂に彼の引退を許さず彼は再び大命を拜した。さうして彼は國家匡救のため、保守、自由兩黨に協力を求めた。兩黨また國難打開の大任を全うすることが、政黨本來の責務なりと考へ、欣然としてこれに参加した。斯くて三派協調舉國一致マクドナルド内閣が出來上り

國難打開に一路邁進した。

僕はこれ聞いて、「矢つ張り彼は自分の想像にたがはず實に立派な哲人政治家であつた」と思つた。さうしてイギリスの黨界「人」あるを知つて、うらやましくも思つた。

イギリスの黨界が今日依然として彼の如き哲人を有するところに眞の政黨政治を發見するのだ。而も彼の英雄的行動をただ黙々として承認してゆくところに、立憲國民としてのイギリス人の偉大さがあるではないか。

今や我國は、國難打開のために哲人政治家の出現を要望すること切なるものがある。……出でよ哲人、國難打開のために！

## 『死』は平等に來る

僕が獨留逸學を命ぜられて臺灣を發つたのは明治四十二年五月の初めであつた。丁度基隆を出帆した翌日のこと、船内が俄に騒々しくなつたので甲板に駆け上つて見ると、一人の水夫が作業中誤つて海に落ちたといふのであつた。

船長は直ちに停船を命じた。さうして救命のボートはおろされた。斯くて不幸の水夫は同僚必死の努力によつて死の海から救ひ上げられた。聽て救命の悦びを乗せたボートは本船に歸つて來た。さうして救はれた水夫自らも、ロープを引つ張りながら、ボートは再び本船に吊り上げられた。先刻から彼の運命や如何にと見てゐた僕は、斯くて始めて自分の胸を撫でおろすことが出來た。

僕はその場合、水夫の沈着な態度に對し萬腔の敬意を表せずにはゐられなかつた。……死地に陥つて『生』を求め得た彼の幸運！ 而も直ちに自己の職務に従事することを忘れなかつた彼の熱誠！ そこに私達は大きな教訓を發見するではないか。

僕は感謝と感激とに充ちた自分の身體を運びながら、再び船室に歸つて來た。さうして新聞に讀み耽つてゐると、その中に或高等女學校の校長が泥酔の結果、辻便所にはまつて死んだといふ記事のあるのに氣がついた。

この新聞記事を讀んで、僕の心は俄に暗くなつた。さうして『死』に就て再び考へさせられたのであつた。……大洋の眞つ只中に落ち込んでも、命を全うし得た沈着な水夫！ 更に辻便所にはまつて命を捨てた愚な教育家！ 何といふ皮肉な對照だ。

『死』といへば僕は直ちにツルゲネーフの書いた『勇敢なる小雀』と題する短篇を想ひ出す。『或日ツルゲネーフが、獵からの歸り道を歩いてゐると、路上に落ちたまだ嘴の黄色い雀の子が可愛い小さな羽をばた／＼さしてゐた。それを見つけた犬は頻りにその子雀を呷へようとした。すると俄に飛んで來た親雀は恰も小石でも投げるやうに犬の口先に強く落ちて來た。犬が

驚いて後へ退くと、雀も飛び去つたが、犬がまた仰へようとすると、再び飛んで来ては犬にぶつゝかつた。併し子雀をかばう親雀の必死の努力も遂に空しかつた。さうして全く力の盡き果てた親雀は、再び飛び上る勇氣もなく、たゞ恐ろしさと驚きの爲に、子雀の上に折り重なつて死んでしまつた。」

子の命を救ふべく必死の覺悟を以て怪物と勇敢に戦つた親雀！ 而も死んでの後も子をかばはんとして、その上に折り重つて倒れた親雀！ そこに私達は雀の偉大なる「母性愛」を發見するのではないか。さうしてそこにほんとに尊い「死」といふものゝ意義を味はひ得るのである。而もそれにも優るやうな貴い教訓が、最近私達の前に展開されたことを忘れてはならぬ。

過般關西地方を中心として襲來した風魔は、可憐な多數小學兒童の尊い生命を惜みなく奪ひ去つてしまつた。さうして同時に殉職の美談を残して死んだ教育者達の數も決して少くはなかつた。殊にその中でも殉職女教員の數の多かつたのは一體何を意味するだらう？

あの場合男教員の勇氣よりは女教員の「愛」の力がより以上に強かつたのだ。自分の教へ子達を身を以てかばひながら、血に染まつて死んだ女教員達の行爲こそ眞に凡てを超越した「母

性愛」の遺憾なき發露ではないか。さうして「刹那に死んで永遠に生きた」その人達の行爲に私達はほんたうに貴い教育の源泉を發見することが出来るのだ。

「生」あるものには必ず「死」がある。生物學者は「死は生と共に始まる」と稱し、カーライルは「死は生の半面だ」ともいつてゐる。故に死は怖れてはならぬ。併し今日の如うに、ただ徒らに死を求めて大死するものゝ多いのも困つたものだ。

死は怖るべきものでなく、また求むべきものでもない。死はたゞ待つべきものだ！ さうして死は私達の總てに平等に來るものだ！



### 伯林で日本語の演説

言葉は人間相互の意志を表現する爲の道具である。而してこの言葉を用ゐて自己の意志を適切に表現するためには話術の修練を必要とする。

併し言葉は同じ國內に於ても多くの方言があつて決して同一でない。殊に外國語を正確に話し、それを間違ひなく聴取るといふことは餘程困難なことである。

嘗て日本の學校で獨逸語を擔任し、會話をも教へてゐたといふ人が獨逸にやつて来て、少しも獨逸語が聴取れなくて困つたといふ話がある。また多年獨逸に留學してゐた某醫學士が、歸朝に先立ち友人達を招待して晚餐を共にした際、興に乗じて獨逸語の歌を得意になつて唄つた。然るにそれを聴いてゐた下宿の娘から「折角だが日本の歌ではチャットも解らないから、今度は

獨逸の歌を聴かして呉れ！」といはれて、ギャフンと參つた話もある。

かうした話はいくらかもあるが、今日はベルリンの真中で「日本語の演説」を試みて、遺憾なくその目的を達した僕の體験を述べて見ることにする。

僕がベルリンに留學した當初のことである、マグデブルグに大きなステーム・ブラオの工場を經營してゐるテッファーといふ老人と懇意になつた。この老人の七十の誕生祝が或日ベルリンのホテル・アドロンで盛大に行はれた。

農林大臣初め多くの人が招待されたが僕もその中の一人であつた。出掛けに下宿のお婆さんが「今日はきつとテーブル・スピーチを頼まれるよ」といふから「學生にそんな要求があるものか」といひながら出かけた。

いよく食卓が始まると、テッファー老を祝福するテーブル・スピーチが次から次に行はれた。さうして、それが三人ばかり済んだ頃、テッファー氏自ら僕のところに来て、是非演説して呉れと要求した。

彼は「多數來賓のうちで東洋から遙々来て呉れてゐるのはお前一人だ。それさへ自分の名譽

であるのに、お前が祝詞を述べて呉れるといふことになれば、更に一段の光彩を添へる、殊にお前の祖國の言葉、日本語で演説して呉れるといふことになれば一層の光榮だ」といつた。

僕はなか／＼うまいことを言ふオヤヂだなアと思つた。「お前に獨逸語の演説は無理だらうから、日本語でやつて呉れ」とはいはぬ。そこにこの老人の話術に妙味があるではないか。

何百人といふ來賓の中で黄色い顔をしてゐるのは僕一人だ。國威を發揚しなくてはならぬと考へたから、「宜しい」といつて引受けた。「それでは、わしが音楽を止めて來る」といつて彼自ら奏樂を中止せしめた。ぐ／＼してゐると座が白らけると思つたから、僕は直ちに起ち上つた。

併し、最初から日本語でやつたのでは意味を爲さぬと思つたから、先づ獨逸語で「日本語の演説をやる理由」を述べたところ「尤もなことだ」といふ聲が方々から聞こえて來た、そこで日本語の演説を初めた。併し誰にも解らないのだと思ふと演説はやり悪いものだ。

勿論、演説は最後の目的を達すればよいのであるから、簡單に祝詞を述べ、「私はテッファ氏の健康を祝福するために、萬歳を三唱したいと思ふから諸君も杯を舉げて唱和を願ひま

す」といつたところ、不思議にも一人残らず起立して杯を舉げた。そこで僕の發聲により「テッファ、君萬歳！」「萬歳！」「萬歳！」と立派に萬歳を三唱せしめ、遺憾なく演説の目的を達した。

悦んだのはテッファ、老人であつた。併しそれよりも尙ほ愉快に感じたのは僕自身であつた。嘗て新渡戸先生の「歸雁の声」に「外國に行つて言葉の通じない場合には、日本語で話すがいよい。さうすれば、自分が啞者でないことだけでも先方に通ずる」とあつたのを思ひ出した。さうして僕はこの演説で啞者でないことを表明しただけでなく、満場の外國人諸君に一人残らず「萬歳」を三唱せしめ得たことを、特にうれしく感じた。

單に音響を發することのみが、話術の全部ではない。話術の基礎を成すものはその人の「人格」だ。さうして話す人が「誠」をこめて話しさへすれば、外國人にも、その意志が立派に通じ得るところに、話術否「話道」の眞髓を發見するではないか。

## 無言の雄辯

僕は前回伯林で日本語の演説を試みて、完全にその目的を達したことを述べた。併しこれは日本語の解らない外國人に聲を發して話しかけた僕の體驗であるが、今日は聲を出さないので自分の目的を立派に達することの出來た一つの體驗を申し述べることにする。

明治四十四年の夏のことである、ストックホルムからクリスチャニヤ行きの汽車に乗つた僕は喉が乾くので、或る田舎の小さな停車場で果物を買ひ求めようと思つて、汽車の窓から首を出して見た。

私達が外國を旅行して言葉の解らない國に行つた場合「旅行案内」等に簡単な會話が載つてゐる。「物の名」だとか「これは幾らだ」とか「ホテ、まで幾らで行くか」といつた様な言葉

位は直に覺えることが出来る。ところがこちらから話しかけることか出來ても、耳が訓らされてゐないから、向ふからの返事が、さつぱり解らない。ぐづ／＼してゐるうちに要領を得なくなるが多い。故にそんなやり方は決して巧な話術とはいへない。そこで僕はどうして果物を買つたか。無論「無言の行」をやつたのだ。

汽車の窓から首を出した僕が、果物賣子の顔をぢつと見詰めると、「はア、果物が欲しいんだな」と思つて賣子が僕の前にやつて來た。そこで林檎をぢつと見詰めてゐると「ハア林檎か」と感付いて林檎を呉れた。更に梨のある隅の方を黙つて見てゐると「ハア、梨が欲しいんだな」と思つて今度は梨を呉れた。

そこで黙つて賣子の顔をヂッと見詰めてゐると向うで「何んぼ？」と質いてゐるのだなと思つて、今度は自分の財布から代金だけの銀貨を取り出して見せた。「はア、二十錢か安いなア」と思ひながら、僕が二十錢出して賣子に渡した。而もその瞬間に汽車はビーと發車してしまつた。

一言を發せず丸で禪問答そのまゝの行き方で、少しばかりの停車時間に完全に自分の欲する

果物とその數量とを買ひ求め、代金も間違ひなく立派に支拂つた。話術もこゝまで行けば上の上なるものだ。

故に話といふものは、常に音聲を出さねばならぬと思ふのは間違ひである。目でものを言ふ目と目で話が立派に出来る。即ち目の働き、心の働きがあれば、言葉の解らない外國に行つても立派に話は出来る。即ち私達はそこに無言の雄辯を發見することが出来るのだ。

嘗て西郷南洲先生が京都の或旗亭で始めて坂本龍馬先生と會はれた。弟子達は今まで會ひ度と思つてゐた兩雄のことであるから、定めし談論風發、偉い話があるだらうと期待してゐた。然るに二人は二時間許り一所にゐたけれども何も話さない。たゞ無言のまゝであつた。

一人は障子に倚りかゝつて羽織の紐を弄つてゐるし、他の一人は縁側をちつと見詰めたまゝでゐる。弟子達には何のことだか、さつぱり解らなかつた。然るに後で二人は「今日程愉快なことはなかつた」といつた。流石は英雄の會見だ、これは詰り目と目とものを言ひ、心と心が相通じたのである。

これと同じ様な話が外國にもある。あの皮肉屋のカーライルを、遙々アメリカからやつて來

たエマーソンが、テームス河畔の寓居に訪れたことがあつた。その時、偉い文豪同士の會見だから、きつと偉い話があつたらうと思ふと大違ひ。たゞ黙々として小半日を過した。それでも後で言ふことが面白い。即ち二人は「あの日程愉快に暮したことは未だ嘗てない、恐らく今後もないだらう」といつてゐる。

たゞ黙つてゐてお互ひの意志が徹底的に相通するといふのは一體何を意味するであらう？…眞の話術はこれではなくてはならぬ。たゞ徒らに聲を張り上げて話をするといふことは眞の話術からいへば末の末だ。

眞の雄辯は人格の發露だ。……故に人格に優る雄辯はあり得ない！

## 江戸男

西洋の諺に「善良な母は百人の學校教師に當る」といふのがある。さうしてあの英雄ナポレオンでさへ「子供の未來の運命は、常に母の細工に在る」といつてゐる。

昔から偉人のおかげには必ず優れた「母」が在つた。單り偉人といはず、我等凡人の場合でも「母」の力がその教育上に重要な役割を演じてゐることはいふまでもない。

「母」の力の偉大であるといふことは、同時に「家庭教育」の大切なことを意味する。従つてペスタロッチーも教育の源泉は「家庭」に在りといつてゐるではないか。然るに我國現下の教育は餘りにも「學校教育」に偏し、「家庭教育」を輕んじてゐるところに缺陷がある……こゝに於て僕は「教育を家庭に返し、母に還せ！」と主張する。

僕は九つの年に母を亡くした、故にこの意味に於て恵まれない者の一人だ。併し母に代つて祖母や姉達が家庭教育の任に當つて呉れたことはいふまでもないが、それさへ十四歳の春を以て終りを告げてゐる。即ち僕が郷里財部の小學校を卒へて東京に上つたのは明治廿七年の五月であつた。その翌年幸にも府立一中の二年に入學することが出来た。さうして夏休みを利用して、初めて歸郷したのはそれから三年ばかり後のことであつた。

或晩のこと、隣近所の小母さん達が來られて、「お前のお母さんが何時もいはれてゐたやうに、立派な「江戸男」になつて歸つて來たのだから、お母さんが生きて居られたら、どんなにか悦ばれることだらうに！」といふのであつた。……「江戸男！」この一言が不思議にも僕の耳を強く打つた。

「小母さん！ 江戸男つて一體何のことです？」

「お前は何も知るまいがお前のお母さんは、お前のことを赤ん坊の時分から江戸男とよんで居られた。お前が泣いたりすると、「大きくなつたら江戸に行つて學問しなけりやならぬ男だ、それに泣くとは何事だ。泣蟲は江戸男にはなれませぬぞ、江戸男は泣くぢやない」と常にいつ

て居られた。お前は今その江戸男になつてゐるのだ。然るにそれを楽しみにしてゐたお母さんは、その日の来るのを待たずして、亡くなられたのだから、ほんとに浮世はまゝにならないものだ！」といつて、今度は小母さん達が泣いてしまつた。さうして僕はその晩の小母さん達の情のこもつた言葉に涙したことを、今でも忘るゝことが出来ない。

自分のことを吹聴するやうで心苦しいが、實はかうである。僕の父は養子であるのに、四人も續いて女の子が生まれた。僕の家では、養子が二代も續かねばならぬかと思ひ惱んでゐたところに、僕が母の胎内に宿つたのであつた。そこで「今度生れるのが男であつたら、江戸に上して學問させるのだ」といふのが、祖父母を初め、家庭一致の意見であつた。幸にも生れたのは男であつた。即ち僕が五人目に長男として生れたわけである。

そんな譯で生れない先から江戸で學問することに決つてゐた僕は、丁度鹿兒島の一中が創立された年に、郷里の小學校を卒業してそのまま東京に上つてしまつた。

併し、母が僕のことを「江戸男」と呼んでゐたことは、その時初めて知つたのであつた。僕は小母さん達の話を聽いて俄に母が戀しくなつた、さうして死んだ母を再びこの世に呼び戻す

術のないのを悲しく思つた。

僕は早く母に別れた。故に母に受けた感化に對する自覺は、その時までには、極めて薄かつた然るに母が僕を「江戸男」と名づけ、赤ん坊時代から激勵して呉れたればこそ、僕の幼心にも「小學校を卒へたら、直に東京に行くのだ」といふ強い信念を持つことが出来たのだと考へ今更ながら亡き母の貴き教訓に感激せざるを得なかつた。さうして僕はこの感激に燃えた心を抱きながら固い決心を以て再び東京に歸つて行つた。

爾來正に四十年、而も母の残した「江戸男」といふ言葉は一日として忘るゝの時がない。

「江戸男！」それは聽くだに古めかしい言葉だ。併し江戸が東京に變り、更に東京が大東京となつた今日でも、僕に取りては依然としてそれが大きな刺戟であり、尊い教訓である。

「江戸男！」僕はこの言葉に母を偲びながら、常に母と共にこの世に在るの氣持で暮してゐる。さうしてそこに一種の温かい「母性愛」を感じるのだ。

こゝに於てか、僕は重ねて「日本の教育を家庭に返し更に母に還せ！」と要求する。



## 『愛』に出發せよ

北歐の一小國デンマークが、世界無比の理想的農業國を完成した基礎は「愛」に出發した教育に依て成されてゐる。故に我國今日の農村の行詰りを打開せんがためには同じく「愛」に出發した教育にその基礎を置かねばならぬ。

斯くいへばきつと「東郷といふ奴は癪に觸る奴だ。愛なんて西洋の眞似みたやうなことを言ふ」と考へらるゝ人があるかも知れない、併し夫は決してさうではない。元來我日本の國は愛を基調として出來上つた國柄である、即ち我國建國の大精神は「愛」に出發してゐるのだ。

我が建國の大精神は三種の神器がよくそれを表現してゐる。即ち鏡は「正義」であり、玉は「愛」であり、劍は「力」である。我が建國の大精神はこの正義を目標として愛のこもつた力

を以てその第一步を踏み出したところに重心がある。故に建國以來常に愛を基調として進んで來たのが我等日本國民であつて、決して西洋の眞似ではない。

然るに現代の日本人は徒らに西洋模倣に偏して我國の歴史を理解せず、その美風をも忘却してゐる。いふまでもなく赤十字社の如きは西洋を眞似た所謂外國模倣の制度である。然るにいづくんぞ知らん、夙に赤十字社の精神を立派に實行したのは、西洋人にあらずして我等日本民族であつたではないか。

國史の示すところによれば、この精神の實際に行はれたのは、遠く一千年の昔である。即ち平將門の亂平定するや、時の天子は敵味方の區別なく戦死者の追善供養を行はせられた。更に降つて天草の亂平定するや、幕府は寺院を建立して切支丹宗徒なる敵の戦死者の追善のことにを行った。

併し、これ等は何れも日本人同志の戦であつたが、今から六百五十餘年前、元寇の亂に元の大軍が到る處に暴威をたくましくしたに拘らず、彼等戦死者供養の爲め高麗寺を建てた。更に三百年の昔、朝鮮征伐から歸つて來た島津義弘公が高野山に於て敵味方戦死者の追善供養を行

つた事實を世人は何と見る。……この敵をも愛する心こそ眞に今日の赤十字社の精神ではないか。斯の如く我國では遠く一千年の昔からその時々赤十字社の根本精神を立派に實行して來たのであつて、この他にも史上幾多の事例を有する。

近くは「敬天愛人」を説いた南洲先生があるではないか。「天を敬し人を愛す！」これが先生の全生涯であり、この哲理の下に國家を進めようとしたのが、我が南洲先生であつた。さういふ風に遠い昔から現代に至るまで、愛を説き愛を行つて來たのが、我等日本民族である。然るに今の人達はこれを忘れてゐる。そこに現代の極端な行詰を發見し、憂ふべき世相の病源を宿すのである。

近年少年團が我國にも出來たが、あれはイギリスのボーイ・スカウトを眞似たといはれてゐる。併しその實はイギリスが日本を眞似たのである。日本の何處を眞似たか、我が鹿兒島の健兒社を眞似たのだ。……日本がイギリスの眞似をして少年團を作つたと聞いて、向うでは微笑を禁じ得なかつたことであらう。

自分達が子供の時分に鍛へられた健兒社のやり方にヒントを得たのがイギリスのボーイ・スカ

ウトである。即ち鹿兒島に生れたものが外國に渡り、洋服を着けて西洋化したのが、イギリスのボーイ・スカウトであるが、それを更に逆輸入したのが日本の少年團だといはれてゐる。さうなると、我等は靜かに我國の歴史を考へて見なければならぬ。さうして特に我等は我が郷土の歴史を考へて見なければならぬ。そこに我等は一種の大きな力を發見するではないか。即ち我等の主張する「愛」は決して舶來品ではない。それは純然たる國産品であり、我が建國の大精神である。故に我等は今日の行詰つた國狀を打開すべく先づ以て九千萬國民に向つて「速かに建國の大精神に甦り愛に目覺めよ」と要求する。……斯くて「愛」に出發した國民の眞剣な努力によつて、初めて國難打開の第一歩は踏み出さるゝであらう。



### 貞操を賣る者

舊多帝都の各新聞は、某國の海軍士官がスパイを働き、多數の日本婦人を誘惑して、軍機の秘密を探らしてゐたことを報じた。

而も、それ等の婦人は單に賣國的行爲をしたばかりでなく、婦人の尊い貞操までも捧げ盡してゐたといふから驚かざるを得ない。殊にその中には最高の教育を受けた人妻もあり、世の所謂インテリ階級の有閑婦人あるに至りては實に沙汰の限りだ。

國民として最高の罪惡は賣國の行爲である。而して國を賣るものは法を以て制裁が出来る。併し貞操を賣るものに對しては、法の力は極めて微弱である。故にこの問題は別に考慮の必要がある。先年ロンドンで知合になつたイギリスの紳士が「自分の國には醜業婦は一人もゐない」

と揚言した。そこで自分は「君はピカデリ街のあの醜い賣在を否認するのさ」とたゞみかけて見た。すると件の紳士は「あれは總て外國の女だ、若しもあの中にイギリス生れの女がゐるならば、それは既にイギリス人にしてイギリス人ではないのだ」と答へた。

「イギリス人であつても、醜業を營む以上、それはもうイギリス人ではない」といふ主張：何といふ我がまゝ勝手な強辯だ。併し一旦醜業を營んだ女の人格的存在を否認するところに、イギリス人の偉らさがある。而して老大國イギリスが、今日依然として世界に重きを爲す所以のものは、その點にあるのだ。

人間は神ではない、従つて何人にも人間としての弱點がある。この弱點が人間から取り除かれない限り、どんな文明國でも性的暗黒面の存在は止むを得ないことかも知れない。殊に醜業を營むものゝ身の上を洗つて見たならば、實に氣の毒な事情の伏在を發見することが出来るであらう。即ちそこに人間社會の大きな憫みが存在するではないか。

現に我國にも性的暗黒面の實在がある。併し醜業を營むものでもそれが日本人である以上、そこには日本婦人としての「貞操」があり、「誇」がなければならぬ筈だ、否過去の日本婦人

には確かにそれがあつた。

嘗ては「露をだにいとふ大和の女郎花降るアメリカに袖はぬらさじ」と辭世一首を残して、自害の上その貞操を全うした遊女「喜遊」を有するのが我が日本婦人の誇りではないか。また開國哀話の一つとして残された下田の藝妓「唐人お吉」が、役人の要望もだし難く、凡ての愛慾を棄て下田の爲めお國の爲めに「生ける屍」となつて玉泉寺に赴き、その身をハリスに任せ、あの犠牲的精神に至りては、吾人一掬の涙なきを得ない。

然るに現代の新しき日本婦人達に、さうした意氣地も犠牲的精神も容易に發見し得ないところに、今日の墮落があるではないか。

先年來、時折行はれた不良外人檢舉の裡面には、常に大切な女の貞操をそれ等外人の蹂躪に任せて平然たるモダンガールの存在するのを自分は苦々しく思つてゐた。更に今回のスパイ事件に至りてはインテリ階級の家庭婦人までが、身も心も擧げて一外人の蹂躪に任せ、國を賣り貞操を賣つてゐたのだから、これは實に社會上、教育上由々敷き國家の重大問題である。然らば、家族制度と共に日本の持つ誇りの一つであつた婦人の貞操が最近頻々としてその墮

落を傳へらるゝに至つた原因は、一體どこに在るのだ？

「都市中心、黄金萬能、享樂第一主義の西洋文化模倣！」それが貞操墮落の最大原因である。元來西洋の物質文化は「個人主義」である、故に「自由主義」といひ「共產主義」といふも所詮は「個人主義」の一表現に過ぎない。

マルクスは共產黨宣言の中に「今日の資本主義社會に於て婦人の貞操は決して完全ではない。従つて共產主義社會に於ては婦人は總てこれを共有とす可し」と説いてゐる。而も現にそれを實行してゐるのがロシアだ。……「婦人の共有！」そこまで進めば社會も國家も、たゞ破滅より他に途はない、さうして最近日本婦人がその貞操を失ひつゝある所以のものは、この思想にかぶれた一つの現れとも見ることが出来る。

共產主義の爲めに破壊せられたドイツの國家を根本的に建直さんとして努力してゐるヒットラーは「婦人よ家庭に歸れ！」と絶叫してゐる。さうしてそこに我等は世界の新しき動きを發見するではないか。

「家族制度」と「婦人の貞操」とが立派に維持されてゐるところに日本の世界的誇りの一つ

があつた。而もその誇りの影うすれ行く現状に直面して、自分は女子教育の根本的革新の必要を主張せざるを得ない。

ラスキンは「婦人の一番正しい教育の目的は他の如何なる場所よりも自分の家庭を愛させるにある」といつてゐる。然るに我國の教育ある有閑婦人達が家庭に於ける最高の幸福を忘れ、たゞ自分の知識をきらめかし、その名譽心を探ぐらんが爲めに、到る處の荒み果てた「見栄ばかりの舞臺」におどり出て、享樂を擅まゝにせんとしてゐるところに貞操の墮落があり、遂にはスパイ外人の手先となつて國を賣るものさへ出現するに至るのだ。

故に女子教育革新の根本は、唯物的知識の偏重を排し、「情操教育」と「人格教育」とに主點を置き「家庭婦人」としての教養を完成するに在る。

斯くて始めて「國を賣り、貞操を賣るもの」を日本の國土から一掃することも出来るであらう。

—一〇・一・九—

### 「學問」よりも「人格」

明治四十三年の夏期休暇を利用して、當時柏林大學在學中の筆者は歐洲各國の旅に出かけた。先づオランダ、ベルギーを視察して、イギリスに渡り、有名な工業地帯を旅行した。

イギリスの鐵道は私設であるが設備はまことに立派だ。三等車にも時折皇族の方が乗られるといふ位だからその立派さが解る。故に學生たる身分の筆者が三等に乗つたことはいふまでもない。

停車場毎に多くの労働者が乗り込んで来る。無論彼等は油だだけの職工服を着てゐるのだ。然るに不思議なことには、彼等と席を同じうして少しも不快を感じない。彼等は新聞に読み耽つてゐるか、さもなければたゞ黙々として端座してゐる。故に室内は恰も水を打つた如うな靜

けさである。……イギリスの三等列車は設備ばかりか、お客までが立派で上品だ。否上品といふよりは寧ろ堂々たるものであつて、その静かなること林の如き態度は實に見上げたものだ。さうしてそこに我等はイギリス人の優れた民族的性格を發見することが出来る。

更に筆者はドーヴァー海峡を横切り、フランス、スイスの旅を終へて、イタリアにはいつた。イタリアの汽車は餘りよくない。故に筆者は無論二等を選んだ。併し乗つて見ると、室内は掃除が行届かず、中にはバネの飛び出してゐるシートもある。更に乗客になると、大きな聲で談笑し、所かまはず痰をはく。これでも二等客かと思へば、一種の情けなさと不愉快さを感じる。……落付きのない下品な彼等の態度！イギリスの三等とは丸で雲泥の相違だ。さうしてそこに我等はイタリア人のこせつした民族的性格を發見するではないか。

イギリスの三等客とイタリアの二等客！この相違は果して何に基因するであらう？

何れの國でも、汽車の二等客といへば、中流階級以上の者が多い。イタリアの二等客も無論同様でなければならぬ。故に彼等は相當の教育があり、學問のある國民層といはねばならぬ。

然るにあの態たらく！筆者はその時以來「學問」そのものゝ力に一種の疑問を抱くに至つた。

イギリスはその當時義務教育さへ完全に行はれてゐなかつた程學校教育は遅れてゐた。殊に三等客の労働者と來てゐるから學問の上では到底イタリアの二等客の敵ではない。然るにこの落付きとこの上品さ！確かにイギリスは「紳士の國」である。

而も「紳士の國イギリス」を完成したのは學問の力にあらずして寧ろ「人格の力」だ。即ちイギリスの教育が「知識」よりは「人格」に「學問」よりは「人間」そのものに重きを置くところ、ここに國家の基礎があるのだ。……「人格」を土臺として凡てを築き上げて行くイギリスは確かに立派だ。

「學問」に着せたモーニングは滑稽に見えるが、「人格」の纏つた職工服は、よしそれが油に汚れてゐても常に光を放つ！同じヨーロッパに國を成しながら、イタリアとイギリスの相違はこの點にある。

さうしてこの相違あるが故に、イタリアに於ては、國難打開の爲めにムッソリーニの獨裁政治を必要とし、イギリスに於ては、マクドナルドを首班とする舉國一致の政黨内閣が、着々と

して國難打開の實を挙げ得るのだ。

國運隆昌の基礎は國民の人格だ！ 國民の人格を基調とした政治は、常に強く且永遠である。

「學問よりは人格！」我國の教育を常に「人格」に出發せしめよ。さうして我國の政治を萬世不易ならしむべく、速かに「人格政治」の確立に邁進せよ！

——一〇・一・一八——

### 「永遠」に立脚して

或時一人の老人が杉苗を熱心に作つてゐた。すると通りがよりの若者が「オヂイさん！ そんなに精出して、お前さんの死に目には合はんだらう」と冷笑した。然るにその老人は「俺の親父の不心得から、俺がこんなに難儀するのだ。さうして俺はこの難儀を子供にさせ度くないのだ」といひながら、脇目も振らずにその仕事を續けたといふ話があるが、如何にも教訓に富んだ話ではないか。

南洲翁も「子孫のために美田を買はず」といつて居られるやうに、我等は必ずしも資財を子供に残す必要はない。併し我等はたゞ自分だけの利益のみに終始してはならぬ。殊に國家の生命は無窮である。故に國民たるものは、常に國家百年の將來を念とし、死の最期まで奮闘しな

くはならぬ。

自分は先年狹野神社に参詣し、あの立派な老杉の姿を仰ぎ見て、驚歎措く能はざるものがあった。而もそれが朝鮮征伐の凱旋報告祭に新納武藏守が君公の名代として参拜した折の記念植樹だといふに至りては、更に一段の感激を覺えた。

新納武藏守は老齡の故を以て、あの戦役には特に留守居役を務めた人だ。然るにその老人が参拜記念として杉を植うるの心掛けに至りては、實に敬服の他はない。爾來三百何十年、神苑の莊嚴は素より、枯損本一本の價、萬金なりといふに至りては、彼の遺徳もまた偉大なりといふべきである。……さうして今日の政治家に特に缺けたるものがありとするならば、それはさうした『將來を念とする心掛け』ではなからうか。

更に日光街道の杉並木に就ても同じやうな話がある。あの並木は日本隨一の老杉並木で、延長十里、樹齡三百年を超えた一萬八千本の老杉が亭々として梢を交へ、風致の絶佳なる實に天下第一品である。

この並木は昔寛永の頃、三代將軍家光が東照宮を日光に營んだ時、普精總奉行大河善兵衛正

綱―松平信綱の父―が寄進したものである、當時諸大名が擧つて唐門を始め、金銅の燈籠等幾多珍物奇玩を寄進するに、獨り正綱のみが杉の苗を植えた。故に世人は『けちんぼう』の代表者の如くに彼を冷笑した。然るに今日はどうだ。風致、價格共にその右に出づるものなく、文部省は『天然記念物』としてこれを指定し、内外人賞讃の的になつてゐるではないか。

茲に於てか自分は正綱の建識に對し尊敬の念禁じ難きものがある。然るに近年並木の枯死するもの多きを加へて來たのは悲しむべきことの一つである。

關係當局の調査によれば、枯死の原因は自動車が第一である。即ち日光への内外觀光客の激増に伴ひ並木路を疾走する自動車の振動によつて根本の土砂が崩壊し、樹根露出し、更に排氣ガスの害によつて枯死するものが最も多い。その他省線列車の煤煙及び杉の根元に山積する道路修繕用の砂利の害等が、その原因を爲してゐる。……さうしてそこに我等は一種『文明の悲哀』を感ずるではないか。

東照宮の華麗な營造物は金さへあれば、短い歲月の間に改築が出来ないこともない。併し枯れた杉並木の回復には、再び三百年の歲月を必要とし、この歲月は金力を以てしても短縮は絶

對に不可能である。故に我等は達人の残した三百年前の大精神を永久に保存すべく、これが保護に努力しなくてはならぬ。さうして斯くすることが、また『現金主義』に墮落し切つた現代人の心を是正する所以でもある。

自分は嘗て阿里山に登り、あの自然林伐採の事業を視察し今更ながら機械力の偉大さ驚いた。併し一度大震災直後の東京市を思はしむる様な伐採跡地の荒廢を見るに至りては、一種の悲哀を禁じ得なかつた。斯くて倶楽部の記念帳に『残せよ伐れよ植ゑよ』と書き残して山を下りた。

『破壊は易く、建設は難し!』阿里山檜の大森林は、何百何千の星霜を経過して始めて出来上つたのだ。無論利用厚生の途を遺憾なからしむるところに人生の目的が在る。故にこの大自然を利用することそれ自體には何等の不思議がない。併しそれにしてもこの大自然を永遠に保存すべく、我等は先づそれを残さねばならぬ。残して然る後始めて伐らねばならぬ。伐つたら必ず植ゑねばならぬ。……さうしてたゞそのみが『破壊なき建設のみの世界』である。

ローマは一日にして成つたものでもなく、また一日にして滅びたものでもない。……我等は

祖國日本の隆昌を無窮ならしむべく、常に『杉の苗木を植ゑるの心掛け』を忘れず、たゞ永遠に立脚して現在に努力しなくてはならぬ。

——一〇・一・二三——

### 生活から見た農村と都會

人間が一個の生物である以上、その第一義的欲求は「生きんとすること」である。故に人間の「生活」は結局、生きんが爲めの努力そのものに過ぎない。従つて人間の生活はそれが日本であらうが、外國であらうが、將たまた田舎であらうが、都會であらうが、原則的には何等の差別がない筈である。ところが實際問題としては、さう簡単に片付ける譯にはゆかぬ。即ち世の中が進み社會が複雑になるに連れて、人間生活も自から國に依て異り、又同じ國內でも人によつて差別が出来、農村と都會との間にもそれぞれ相違を來すのが普通である。そこで「生活から見た農村と都會」を一言以て評するならば「農村の生活は神と共に清く正しく生きんとする生活であり、都會の生活は惡魔に引きずられた醜い墮落の生活である」とい

つてよい。

いふまでもなく、人間の心の中には常に二つの異つた力が宿つて居るのであるが、その一つは「誇大性」であり、他の一つは「批判性」である。「誇大性」は自然を支配せんとする力であり、現實な生活に甘んぜずして、より以上進んだものを想像する力である。これに反して「批判性」はこの想像を打消して、現實に則し自然をそのまゝ、赤裸々に觀んとする力である。さうして誇大性の極度に表現されたものが「神」であり、批判性を極度に表徴したものが「惡魔」である。而も前者が「神性」を帯び、後者が「獸性」を帯びてゐることはいふまでもない。斯くの如く、人間の心の中には何處までも、人間を理想的に向上せしめんとして努力するところの「神」と、絶えず人間を醜惡に引きずり落さんとしてもがいてゐるところの「惡魔」とが共存してゐるのである。さうして人間が神の力に支配されることの強い場合には、その人は「善人」と稱せられ「人格者」と稱せられ、その人の「生活」は清く正しいのである。これに反して、惡魔の力に支配されることの強い場合には、その人は「惡人」と稱せられ「非人格者」と稱せらるゝのであつて、その人の「生活」は醜い墮落の生活である。



更に一國の文化が、その國を組織する國民全體の心の表現であり、民族精神そのもの、發露なりとするならば、その國民が神に支配されることの強い場合には、神性を多分に帯びた「精神文化」を作り上げ、惡魔に支配されることの強い場合には、獸性を多分に帯びた「物質文化」の出現を見ることになる。

然らば例の産業革命に相亞いで驚くべき發展を遂げた歐羅巴文化は、兩者何れに屬するか、私達はそこに神の支配する精神文化を發見せずして、寧ろ惡魔の支配する都市中心、黄金萬能、享樂第一主義の物質文化を發見する。而して今や世界到るところの國々が、この物質文化によつて旋風の如く吹き捲くられ「進歩と行詰」との中間にさまよい狂つてゐるのである。而もこの物質文化を模倣したところに、我國の新文化があるといふならば、我國の文化的施設が總て都市に重く農村に薄いのでは當然の歸結である。さうして今日の憂ふべき世相の病源がそこに潜んでゐることを私達は忘れてはならぬ。

今や我國の農村は、物質文化の犠牲となつて、幾多の行詰を生じて居る。農村の中堅分子として明るい農村を背負つて起つべき大使命を有する筈の青年男女達は「神と共に清く正しく生

きんとする農村生活」に見切りをつけ、華やかな都會生活を夢みつゝ農村を捨て、顧みないのである。嘗つてローマ帝國の盛んなりし頃、多くの農民がローマ市の賑盛に憧がれ鋏を捨て、農村に反き、ひたすらローマ市に集り來つた結果、地方農村の荒廢、その極に達し、總てそれがローマ帝國滅亡の主因を爲すに至つたことを思ふとき、私達はこのまゝヂツとしてゐられない様な氣がしてならぬ。果して都會の生活は、純眞な農村の青年達が想像してゐる様に、そんなに美しく且つ幸福なものであるだらうか。

東京の銀座や、大阪の道頓堀はいはすもがな、全國到るところの都市に盛んに發展しつゝある「盛り場」の現状を世人は果して何と見る。ネオン・サインの輝かしい街、耳も聳せんばかりのジャズの音、脂粉の香りただよふその中に老も若きも、たゞ利那的享樂に耽溺してゐる。その醜い有様はどう考へて見ても、それが日本人の生活風景だとは思はれない。既に述べた通り人間の心の中には常に神と惡魔が共存しに居る、故に人間に向つて神性のみを要求するのは無理である。人間が神でない以上、それは出來ない相談である。併しながら、出來る丈け惡魔の力を抑へつけ神と共に清く正しく生活することに最善の努力をするのが今日の急務ではない

だらうか。然るに近來頻々として有閑マダムの醜い生活の内容が暴露せられつゝあるのは、まことに残念なことであつて、都會生活の墮落正にその極に達せんとしてゐる現状を慨歎するものは、敢て僕一人ではなからうと考へる。

醜い都會生活の縮圖とも稱すべきは、有名なゲーテの書いたファウストの第一部である。惡魔に魅られたファウストが物質の魔力を以て、純潔玉の如き田舎娘のマーガレットを墮落に導き、戀の勝利者として思ふがまゝにその甘きを味ひ盡し、遂に嬰兒殺の科によつて、可憐の少女を牢獄の中に悶死せしむるに至つた、といふのがファウストの第一部に書かれた内容である。而も我國現下の都會生活にファウストの第一部そのまゝの事實を發見するといふならば、私達は速かにこの醜い墮落の生活から脱却すべく最善の努力を致さねばならぬ。

ファウストの第二部は、一旦物質と本能とに墮落したファウストが、再び精神界に甦り、海を支配せんとして開拓事業を行ひ、新に農業を興し、農村中心の精神文化の建設に努力し、神と共に清く正しく生活するの途に進んだことを説ひて居るのである。それと同じ様に我國現下の經濟的行詰を打開し、墮落せる國民生活を一掃し、元氣潑刺たる國民精神を喚起せんとするな

らば、どうしても農村中心の精神文化を再建し國民生活の基調をそこに求むるの國策を樹立することが今日の急務である。併し玆には國策に關する鹿爪らしい議論は一切これを抜きにして、我々國民の一人／＼が、經濟生活の行詰打開の爲めに、やらねばならぬと思ふ一、二の問題に付て愚見の一端を述べて見ることにする。

私達の經濟生活は今や極端な行詰を來してゐるが、その行詰の原因は無論二、三にして足りない。併し「國民の經濟思想に缺くるところがあるといふこと」が大きな原因の一つを爲してゐることは事實である。特に婦人に於てその缺點の多いことを否む譯にはゆかぬ。リュッケルトが「細君が前掛に包んで家から持ち出す額は、夫が收穫車で持ち込む額よりも多い」といつて居るが、これは男よりも女の方が遙かに浪費者であることを説明したものであつて、その點東西その規を一にしてゐる。収入よりも支出の多い農家經濟が行詰を生ずるに至るのは當然のことである。併しこの點は都會生活に於ても別に變りはない。獨逸では収入の三分の一は貯蓄するといつて居るが、實際に於て獨逸人程無駄を排除し質實な經濟を營む文明國人は少いかと思ふ。而してこの貯蓄に依て得たところの資本を元手として、更に積極的に經濟生活の向上發

展を計るところに獨逸人の強味があると考へる。故に我國に於ても今日の行詰つた經濟生活を打開せんとするならば、全國民を擧げて、無駄排除に努め、浪費をいましめ、收入の一部を貯蓄するの工風に精進しなければならぬ。而もこの點に於て、私は特に御婦人方の反省と奮起とを要望するものである。經濟生活行詰の打開は先づ臺所から！そこに私達は御婦人方の大きな使命を發見するではないか。

斯くの如く經濟生活行詰の打開は、先づ節約よりその第一步を踏み出さねばならぬ。併しこれは一つの消極的手段に過ぎない。故にほんたうに我國民の全體を通じて、田舎といはず都會といはず、更に富者といはず、貧者といはず總てその生活に幸福あらしめんとするには、どうしても百尺竿頭更に一步を進めて積極的に努力する必要を痛感せざるを得ない。而してこの點に於て私には忘るゝことの出来ない一つの思出がある。

それは私が嘗つてベルリン大學に在學中の出來事である。私の下宿してゐたうちの女主人は既に六十を越したところのオールドミスであつた。然るにこのお婆さんなかく立派な人物で、學問もあり、修養も出來てゐたが、私に取りてはベルリン大學の世界的な學者達から聽いた講

義よりも、このお婆さんから朝晩聽いた話の方が遙かに人間修養には役立つたのである。それでこれから申上げるのもそのお婆さんに關する話の一つである。

或日の事、ベルリンに珍らしく雪が降つた、朝から降り初めた雪が午後になつてもまだ降り止まなかつた。午後の茶の時間になるとお婆さん何時もの通り私の部屋にやつて來て、四方山の話をしたのである。私は國自慢のつもりで「お婆さん、日本の國ではこんな雪が降ると、雪見酒といつて酒を飲み乍ら、綺麗な雪景色を眺むる風流心がある。併し物質一點張な獨逸人にはそんな風流心はないだらう」といつた。お婆さんは何の返事もしないで、私の部屋から出て行つたが、今度は大きな皿にパン屑を一杯入れたやつを持つて來た。さうしてそれをバルコにそつと置いて來て私の側の椅子に靜かに腰をおろした。

そこで私は「お婆さんあれは一體何だ」と質ねた、するとお婆さんは餘ろに口を開いて「お前の祖國日本では、雪見酒を飲みながら雪景色を眺める風流心があるといふ、それも結構なことだ。又獨逸の國では、雪が降れば、店先の往來の雪を取り除ける規則になつてゐるから、今日の様な日には労働者が仕事にあり付くから、いはば人助けになる、故にこれも結構なことだ。

併しこゝに一つ結構でないものがある。それはあの小鳥達だ。彼等は今朝からそこいら中を飛び廻つて餌を探し求めてゐるのだが、この大雪では餌にありつくことが出来ない。お前には、あの空腹に悩み切つた小鳥達の悲しい鳴き聲が聞えないか、わしは今その哀れな小鳥達に餌を與へたのだ、それが私達人間の當然果さなければならぬ一つの大きな務めではないか」といひながら、チーツと私の顔を見つめたのであつた。そしてその時の彼の女の顔は實に聖者の如く輝いて見えた。

私は慈悲深いお婆さんのこの行ひを見て實に立派だと思つた。さうしてさき程のお國自慢が恥かしくなつた。成る程さうだ、あの悲しい小鳥達の鳴き聲こそ、眞に生きんとして努力するものゝ憐みの叫びだと感じた。さうして「神は鳥に餌を與へ給ふ、併し鳥はそれを得んが爲めには飛ばねばならぬ」といふあの和蘭の諺を思ひ出さずにはゐられなかつた。

神の目から見れば總ての人類、否なあらゆる生物悉く一切平等である。英雄の死ぬのも、雀が軒に巢を作るのもそこには何等の差別がない。天は總ての生物に生きんが爲めに必要な食物を平等に與へ給ふのである。併し斯の如き天の恵みは「果報は寝て待て、牡丹餅や棚に在り」

といつた様な不心得者には與ふべきものではない。即ち鳥ならば羽一杯力一杯飛んで、天與の餌を探し求めなくてはならぬ。ところがいくら飛び廻つても雪降る日には餌を探し得ないのが小鳥達の運命である。さうしてその哀れな小鳥達に餌を與へるのが人間の務めではないかといつて餌を與へた下宿のお婆さんこそ、實に天使の如き仁愛と慈悲と同情とに富んだほんたうの人間だといはなければならぬ。そこに私達は實に貴い「仁愛の涙」を發見するではないか。人間の慈悲が禽獸にまで及んだといふのが、このお婆さんの行ひである。この氣持を特に御婦人方によく味つていただきたいものだと思へる。

併し、食を求めて求め得ないものは、單り雪降る日の小鳥ばかりではない、人間の生活亦然りである。今日の日本の姿が即ちそれではないだらうか。あの若くて死んだ詩人啄木は「働けどはたらけど、わがくらしなほも樂にならざり、ぢつと手を見る」と歌つて居るが、この歌以上に行詰つてゐるのが、今日の日本の實情である。いくら働いても働いても生活が樂にならないどころか、働けば働くほど損をするのが今日の「農村生活」である。否な働かうと思つても、仕事の與へられない窮狀に置かれた人の少くないのが、今日の「都會生活」ではないだらう

か。……力一杯働いても家族全體の生活を保證し得ない人達、更に働かんと欲しても仕事のない人達、それ等の生きて行くに必要な食糧の問題、考へ来れば、雪降る日の小鳥にも等しき多くの人達が日本の國に私達と共に生存してゐることを忘れてはならぬ。

私の郷里鹿兒島縣は本年未曾有の大旱魃に悩んでゐるが、今や食糧に窮した農村から身賣する娘達が續出するに至り、鹿兒島縣の遊廓丈けでも最近五十人の多きに達したと報じて居る。人間生活の最少限度は食ふことである。その生きんが爲めに必要な食物に窮乏を告げ、可憐な娘の貞操まで賣らねばならぬ人達の不幸、涙無くして聽くことの出来ない農村生活の悲惨事ではないか。私達は食なき者に食を與へるの途を講じなくてはならぬ。

自分さへ出世すれば人はどうでもよい、自分さへ金持になれば、人は乞食してもかまはないといつた様な利己的氣分が濃厚になり増さつて來てゐる我國の現状、そこに經濟的に思想的に多くの行詰を發見するのである。私達は自分の幸福を考へると共に、隣人の幸福をも考へなくてはならぬ。否な日本人全體の幸福を考へ、更に世界全人類の幸福をも考へなくてはならぬ。西洋の物質文化は兎もすれば、個人主義に流れ、そこに個人としては利己的に墮し、團體とし

ては、自己の屬する團體のみの幸福を考へるやうになる。それが十七、八世紀時代には君主專制主義を生々、その結果革命の慘劇を演出し、現代に於ては資本家專制又は労働者專制の運動となり、激烈な階級闘争を招來して今日の思想的經濟的行詰を見るに至つたのである。

故に今日のあらゆる行詰を打開せんが爲めには、單に「個人の幸福」のみを目的とせず、又「最大多數者の最大幸福」のみを目標とせず、國家國民全體の幸福を目標として進まねばならぬ。而してその昔たつた一頭の羊の行衛をたづね求めたといふ、あの羊飼ひの心を心とし、「全國民のよりよき生活」の實現に向つて精進しなくてはならぬ。そこでこの目的達成の爲め私は舉國一體國民一致の眞剣な努力を要望するものである。即ち全國民がそれ／＼自分の生活を反省し、それに感謝し生活に余裕あるものは、余裕なき者に援助を與へるといふ大精神に目醒める時、そこに初めて國民全體の生活を一樣に幸福ならしめ得べき「朗かな日本」が生れ出づるであらう。仁愛、慈悲、同情等に關する點の美德發揮は世の所謂慈善を職業とするやうな人達のみ任せ置くべきものではない。それは實に全國民の日々の業務たるべきものである。そこまで進めば雪降る日の小鳥に比すべき悲しみもない「眞の理想郷」が實現せられるので

あらう。斯くて私は國民生活の上から見て農村も都會も何等差別のない平等均一な理想的國家  
完成の日が必ず到來すべきものだといふことを茲に斷言してはどからないものである。

——九・九・二一、ラヂオ放送——

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）

### 道は遁きに在り

明治維新の當時相當な儒者であつた伊達翁——陸奥宗光伯の父君——が京都の相國寺に高僧  
越溪禪師を訪ねたことがあつた。

翁は和尚に面會を求め、『私は儒學を修め道の何物たる位は心得てゐるつもりですが、禪の  
道はまた格別と存じ、今日は道のお話を承り度いと考へて推参しました』といつた。すると和  
尚はいきなり大きな平手で翁の横面をいやといふ程たゞいた。驚いたのは伊達翁、思はず部屋  
の外に飛び出したが、和尚は靜かに起つて襖を締め、更に元の座に直り、平然としてゐた。  
伊達翁は逃げ出しては見たものゝ無念で堪らず、襖の外で刀の束に手を掛け、今にも斬つて  
入らんとする姿勢を示した。それを見た一人の雲水は『何事？』と質ねた。『何も彼もあつた

ものではない、今和尚は予に無禮を加へたが武士の面目用捨は出来ぬ、斬つて捨てるのだ」と恐ろしい權幕!

これを聞いた雲水「私には何も分りませぬ、併し事は後で分りませう、先づこちらでお茶でも召し上れ!」といつて茶の間に案内して番茶を汲んで出した。翁は何心なくそれを飲まうとして、口の邊まで持つて行つた時、雲水は茶碗を持つてゐる翁の利腕をポンとたゞいた。……茶はこぼれて盤の上は一面茶の海となつた。

その時雲水は翁に向ひ「貴下は道の何物たる位は心得てゐるといはれたが、それでは一つ承りませう」といつて、「如何なるかこれ道?」と質ねた。

伊達翁は四書五經何れの句を持ち出さうかとあせつたが、急に名句が浮んで來ない。すると雲水は聲を勵まして「如何なるかこれ道、はやく言へ!」と切り込んで來た。併し一向に道が出て來ない。そこで雲水は、「甚だ失禮ではあるが、私共の道をお目にかけてませう?」といつた。

翁はこんな若僧に道を聞かうと思つて來たのではなかつた。併し自分の道が出て來ないので

止むなくうなづいた。すると雲水は手近にあつた雑巾を取つて、こぼれた番茶を拭き終つて、靜かに「私共の道はこれでありませう」といつた。

翁は始めて成る程と思つた。さうして「豫てから道は通きに在りと聞いてゐた。道は須臾も不可離と知つてゐながら、これを遠きに求めた」と大に語り、更めて越溪禪師の部屋に入り教を受け、辛參苦修年を重ね、自得居士といふ居士號まで授かつて大人物となるに至つたといふことである。

この話は「禪の道」に關するものであるが、道は凡て一つだ。然るに現代人が常に道を遠きに求めてゐるところに祖國日本の行詰りがある。我國の教育は近年驚くべき發展を遂げた。併しその實際は知識の形式的注人に偏し、國民の實生活とは没交渉な空疎極まるものが少くない。

子供達に「世界一の大都會は、高山は、大河は?」と質ねたならば、彼等は即座に答へ得るであらう。併し國民生活に必要な「水道」や「電氣」に關しては、更に實際的な知識が與へてない。従つて水道や電燈を平氣で浪費してゐる。斯くて日本國民の生活には無駄が多く、それ

がまた経済行詰の一因ともなつてゐる。

歐洲大陸の面積は心得てゐても、自分の住宅の建坪を明確に知つてゐるものは少い。即ち今日の教育は『茶のこぼれた場合、その處理法を教科書に求めようとする』教育であり、更に『こぼれた茶は今に疊が吸ひ込んで呉れるだらうと思つて黙つて見てゐる』様な教育だ。……それでどうして、ほんたうの人間生活が營まれるものか。

故に我等の要求する教育は、もう少し國民の實際の生活に則したものでなくてはならぬ。…

『道は通きに在り、茶がこぼれたら、直ちに雑巾で拭く』教育でなければならぬ。

五ヶ條の御誓文にも『知識を世界に求め』とある。故に我等は常に廣く知識を世界に求めなくてはならぬ。併し我等は『人』を知る前に『己』を知り、『世界』を知る前に『日本』を知らねばならぬ。而してこの目的達成の爲めには何を差し措いても『日本の歴史』を徹底せしむることが先決問題である。

過去に於て、我等は餘りにも内を虚にして知識を外に求め過ぎた。繰り返していふが、無論知識を世界に求めることは必要だ。併しそれよりも尙ほ大切なことは、先づ以て知識を内に求

むることだ。『道は通きに在り！』我等は先づ道を近きに求め、然る後これを遠きに求めなくてはならぬ。

即ち先づ以て我等の足下に横はる祖國の大地を深く掘り下げ、そこに『日本精神の泉』を求めなくてはならぬ……然り道は通きに在るのだ！

——一〇・一・二九——



## 青年學校と老將軍

嘗てアサー・クナップは「二百餘年の長きに亘り平和を持續し、戦争の實際的訓練を怠つてゐた日本人が日清日露の兩戰役に偉大なる戰鬪力を發揮したのは、維新以來その遂行した文明の異常なる進歩と共に、實に驚くべき一種の奇蹟である」といつた。

然るに例の平和論者である生物學者のジョルダン博士は「日本人が太平二百餘年の長き歲月を持續したればこそ、始めて今日の如き有力な武勇の國と爲り得たのであつて、その間何等の不思議はない」と論じてゐる。

古來よく戰つた民族は常に衰頹の途を辿つたものが多い。これは戦争が優秀なる國民層を犠牲に供し且つその「種」をも絶滅するからである。西南戦争が我等の郷土鹿兒島から優秀の人

物を多く奪ひ去つたばかりでなく、その「種」をも根絶したことが、人物凋落の主因を爲してゐることは何人といへども否認することが出来ない。……この意味に於て徳川三百年の太平は確かに優秀なる國民層の維持發展に資するところ多く、遂に今日の偉大なる武勇の國日本を生むに至つたともいふことが出来る。

併しそれよりも僕はクナップが維新以來我國が文明の異常なる進歩を遂げたのが一種の奇蹟なりと主張した點に對しては特に強固なる抗議を呈するものである。

單にクナップに限らず、我國が短き歲月の間に西洋文化を攝取し非常の發展を遂げたことを一種の奇蹟と見る人が少くない。併しそれは決して奇蹟ではない。即ち我國が明治維新以來驚くべき文化の發展を遂げたのは、我國が極めて優秀なる「精神文化」を持つてゐたからである。この精神文化を土臺とし、その上に西洋の物質文化を輸入し、そこに新しき文化の建設に努力したからである。

故に我國の新文化建設の基調を爲すものは、我國獨特の「精神文化」そのものであつた。而してこれあるが故に我國が西洋文化の攝取後久しからずして驚くべき新文化を建設し得たので

ある。……然るに今や我國の文化は徒らに物質に偏し我國固有の精神文化がその影を潜めたと  
ころに、今日の行詰りを發見するのだ。故に今日の急務は地中深く埋れた精神文化を再び我等  
の地上に呼び戻すことである。

僕は一昨年夏、日本青年館に於て開催せられた文部省主催の講演會に於て、この意味の講  
演を試みたことがあつた。僕が講演を終へて控室に引き上げると田中館博士外一人の老人がや  
つて來られた。さうして「久しぶりに氣持のよい講演を聴くことが出來てうれしい」といひな  
がらその老人が次の様な話をせられた。

今から五十年近くも前のことである。自分が南獨逸の或町に留學してゐた際知人になつた人  
にコーリンスといふ英國の海軍大佐があつた。この人は薩英戦争の折青年士官として英艦に乗  
つてゐた人であつた。この人の話に「日本の最近二十年間に於ける驚くべき文化の發達を世人  
は不思議の如うにいふが、自分はさうとは思はない。自分達の軍艦が支那の或港に碇泊してゐ  
ると本國政府は日本に行けと命じた。支那さへこんな状態だから、日本はどんなにか野蠻な國  
だらうと思つてゐた。然るに行つて見ると意外にも禮儀の正しい立派な紳士國であり特に薩摩

人の武士道の優れてゐた點は敬服に價した。この優れた固有の文化——精神文化——を有すればこ  
そ、西洋の物質文化攝取後久しからずして今日の大發展を遂げ得たのであつて、そこには何等  
の不思議がない」といつて大に日本固有の精神文化を禮讃して呉れたことがある。自分はこれ  
と君の講演とを思ひ合せて非常に愉快であると語られた。

併し僕はその老人が誰であるかは知らなかつた。田中館博士と同年輩に見えるから、古く獨  
逸に留學された老博士だらうと考へながら、その面白い話を謹聽したまゝ別れてしまつた。

然るに去る一月二十日の午後總理大臣官邸で開かれた「文政審議會」に於て偶然にもその老  
人が何人であるかを知ることが出來た。

今回文部省は實業補習學校と青年訓練所と合併し「青年學校」となすの案を作成し、文政審  
議會に諮問した。僕も委員としてこの會に出席したが諮問案に對し意見を開陳すべく起つた一  
人の老委員こそ、一昨年日本青年館でコーリンス大佐の話をして呉れたあの老人であり、而も  
その人は學者ではなく嘗て陸軍大臣をしたことのある陸軍中將大島健一氏であることが分つた。  
老將軍はその日もコーリンス大佐の言を引用し、我國固有の精神文化を説き、新しく生れん

とする「青年學校」に於ても精神教育に主點を置くべきことの必要を力説せられた。僕は今更ながら老將軍の憂國の至誠に感激せざるを得なかつた。

「青年學校」は近く實現するであらう。僕はこの學校が青年大衆の教育機關として、その大使命を達成すべく、先づ「精神教育」に出發せんことを熱望して息まぬ。

—一〇・二・六—

### 南 京 蟲

去る二月一日の豫算總會に於てN代議士が人權蹂躪問題に關し質疑を試み、市ヶ谷刑務所に收容された某氏が南京蟲に惱まされ一週に五十匹も捕へたといふ話を盾に取つて小原法相に肉迫した。すると小原氏は決してそんな事實はないといつてこれに應酬した。

僕はこの押問答を聴きながら嘗てベルリンで體驗した南京蟲事件を思ひ出さずにはゐられなかつた。

今東京にゐる僕の友人にA及びBの兩君がある。A君は農學博士で製糖化學の大家であり、B君は法學士で、我國保険界の重鎮である。併し話は僕等三人がドイツ留學當時のことであるから、もう二十四、五年も前のことである。

その頃保険學研究の爲めゲッチンゲン大學にゐたB君が或時親類に當るA君を頼りにベルリンに遊びにやつて來た。併しA君の下宿にはベッドのあきがなかつた。そこで下宿のお神さんの骨折で、丁度差し向ひに住つてゐた若くて美しい女優の宅に泊めてもらふことになつた。そこで喜んだのはB君であり、美ましがつたのはA君であつた。

B君はその晚美しい女優の世話を受けたが静かにベットにはいつた。さうして夜が明くれば、彼の女のやさしいお給仕でうまいコーヒーが飲めるのだと思ふと嬉しくてたまらなかつた。

一方A君はB君の身の上を羨みながら寝ては見たものゝ、眼がさへてしまつて、一晩中眠ることが出来なかつた。さうして東天が漸く白み初めたと思つてゐると、今度は入口のベルが、けたましく鳴りひびいた。

今頃ベルが鳴るのは不思議だと思ひながらA君が、起き上つて入口の戸をあけて見ると、意外にもそこには凋れ果てたB君が寝巻姿のまゝシヨンポリと立つてゐた。

「一體今頃どうしたといふのだ？」とA君がたづねた。すると「どうしたも、かうしたも無いものだ。これを見て呉れ！」といつてB君は腕をまくつて見せた。

「オヤ！ 君は南京蟲にやられたね」

「その通りだ、昨晩は色々楽しい夢を抱きながら眠りに就いた。……丁度天國にでも昇つた様な氣持で！ 併しそれも東の間、程なく身邊に異變あるを覺えて眠りから醒めた。さうしてそれからといふものは、一晩中一睡も出来なかつた。……それもその筈！ 南京蟲は夜を徹して僕を總攻撃したのだからたまらない……」

よく見ると顔といはず、腕といはず、B君は全身悉く南京蟲に食はれて腫れ上つてゐた。

「さういふ譯で、夜の明けるのを待ち切れなくて、飛び出して來たんだ」といつて彼は悲鳴をあげた。A君は「それは氣の毒だつたね」と口ではいつたが、心の中では「よい氣味だ」と思はんでもなかつた。

聽てこの話を下宿のお神さんにすると「それは氣の毒だつた、今夜からはお粗末でも、家族用のベッドを一つ空けてあげる。わしのうちには南京蟲だけはゐないから、安神しておやすみなさい」といつた。

B君は女優に心ひかれながらも、南京蟲に恐れを爲し、その晩からはA君の下宿に泊ること

になつた。併しB君はこゝでも依然として南京蟲の襲撃を受けた。

B君はこの事情を度々お神さんに訴へたが、彼の女は「わしのうちに南京蟲は斷じてゐない」といひ張つた。

そこでB君は證據を押へて談判するより他に途なしと考へ、爾來南京蟲の捕獲に苦心した。ところが或日のこと、僕がA君のところに遊びに行つてゐると、B君が悦しさうな顔をしてやつて來た。さうして「證據物件を押へたよこれを見給へ」といつて差し出したのを見ると、それは確かに一匹の南京蟲であつた。

B君は「いくらお神が強情でもこれにはきつと兜をぬぐだらう」と勇み立つて、お神の部屋に押しかけて行つた。さうして「どうだ、これでもまだ降参しないか」と詰め寄せた。

然るにお神は平然として「イヤわしのうちには今まで南京蟲は絶対にゐなかつた。それはお前が向ひのうちから一しよに持つて來たのだ……」と逆襲して來た……無論このうちにも南京蟲は前からゐたのだ。たゞ免疫性になつてゐるから食はれても感じないだけのことだ。併しこの喧嘩は結局B君の負けとなつて、けりがついた。

綺麗なバラの花にも刺がある。併しあの美しい女優が南京蟲の伏兵を持つてゐようとは夢にも思はなかつた。そこにB君の不覺がある。「鹿を追ふ獵師は山を見ぬ」の例へ！ 併し人生には常に「南京蟲にくはれぬだけの用心」が必要だ。

——一〇・二・二二——

## 人格政治の確立

僕が平靜なる官界に舟を乗りすて、波瀾多き政界に駒を進めたのは、大正十三年の總選舉であつた。然るに僕のこの決心をきいた友人先輩の或一部の人は、眞面目に、眞剣に僕のこの決意に對して反對の意志を表明した。しかして、純眞な役人生活をした者が、あの腐敗し切つた黨人の仲間入りをするのはあたかも、羊が狼の群に投ずるやうなものだと云ふのが、その人達の主なる反對理由であつた。

僕が、熟慮の結果政界入を決心したのは、今日の儘我國の政黨が何等更生することがなく進んだなら遠からずして、我國の政黨は國民の信任を失ひ、遂には政黨政治の破滅を見るに至るであらう、かくては、我國の政治は向ふ所を知らざるに至り政治的の一大混亂を招き、憲政有

終の美を收めることは頗ぶる困難であると考へたからのことであつた。自分は必ずしも先輩達の憂ふる程政黨人が墮落して居るとは其時でも思つて居なかつた。よし又さうであつたとしたならば、我國の政治を狼の群に任せておくわけには行かぬ。果して世人の考へて居るやうに我國の政界が腐敗墮落の極に達して居るものであつたならば、之が淨化は國民自らその任に當らなければならぬ筈である。

政界の淨化が今日急務であるとしたならば、たゞ徒らに外面から論難して見たところで、その目的を達し得るものではない。内面から淨化に努力する者が輩出してこそ始めてその目的は達成せらるゝのである。

故に先輩の忠言に對し「古今の歴史を緝いて見ても、或る事業を達成するには必ず其處には犠牲が拂はれて居る。即ち我國の政界革新の爲に犠牲を必要とするならば、自分は喜んでその犠牲にならうと考へる。然し、羊が必しも狼に負けるものであるとは決して居ない、狼に食はれるか食はれないか、それは今後の事實に徴するより外に知るよしもないわけであるが、食はれても自分は満足だ」と答へながら、遂に政界に飛び込んで仕舞つた。飛込んだ以上は、自分

の理想とする人格政治の確立に努力して来たつもりであつたが、微力にして何等この目的に貢献することの出来ない間に早くも十年を経過し遂に今日の如き政黨そのものゝ行詰りを見るに至つたことを甚だ遺憾に思ふ。

政治は力なりと云はれて居るが、成程政治には力が必要であつて、力のない政治は何んの役にも立たない。然し、この力に大きな誤解がある。政治に必要な力は金の力でもなければ策の力でもない。無論政治には力が必要であるけれど、一も金、二も金、三も金と云つた様な今日の實情では到底公明正大な政治は出来るものではない。不淨の金を多くかき集めるのが天下取りの近道であるかの如く考へ、金の力を唯一の武器と考へて居るやうな歩みかたを取つて居るところに政黨の行詰りはあるのだ。政治には、時に策も必要だ。然し、徒らに小策を弄し、明けても暮れても小刀細工に没頭し、それ以外には何物もないと云つたやうな陰謀政治家は、遂に國家を破滅に導くものである。策の力は政治を陰鬱ならしむる以外に何等の効果がない。我國の政黨政治が、策に墮した處に今日の行詰りを發見する。

政治に必要なのは、金の力、策の力にあらずして、實に偉大なる人格の力である。今日の政

界を淨化し、今日の政治を公正ならしむるものは、單に偉大なる人格の力あるのみである。即ち人格政治の確立はこの偉大なる力に依つてのみ實現することが出来る。

今日の政黨政治行詰りの責任は、勿論政黨政治家がその責任を負はなければならない。政治の淨化は、政黨の淨化に之を求めなければならないし、政黨の淨化は更に選舉の淨化に出發しなければならぬ。故に今日の政黨政治行詰りの責任は、全國民もまたこれを分擔しなければならぬ。

フランスの諺に「現金に優る雄辯なし」と云ふのががあるが、我國の選舉そのものゝ真相を表現するに如何にも適切なやうな言葉であるのを常に遺憾に思つて居る。我等は「人格に優る雄辯なし」と云ふのをモットウとして、先づ選舉界の淨化、革新を計ることが政黨更生の近道であり、政黨政治革新の第一歩であると考えらる。

然し、今日の行詰つた政界を打開し政黨政治を更生せしめんとするには、矢張り、政黨人自ら反省し、奮勵努力しなければならぬのであるが、残念ながら今日の黨界には偉人なく哲人がない。其處に政黨政治行詰りの根原を發見せざるを得ない。

本年の某雑誌の新年號に、『今後百年も経つて東郷實みたやうな男が七、八十人も黨界に出たならば、或は今日の黨界が少し位は淨化されるかも知れない。故に今日に於ては東郷實は一種の理想家たるに過ぎない』と云つた記事のあるのを讀んだが、僕は理想を實際に實現し得ると思ふ、人格政治確立は決して百年の年月を要しないと確信して居る。

而して人格政治確立のためには哲人政治家の出現が前提條件として必要だ。故に今や我國は國難打開の爲に哲人政治家の出現を要望すること切なるものがある。國難打開の爲に必要な政治家は、常に國家を念とするところの哲人政治家でなければならぬ。此處に於てか吾人は黨界革新の爲にまた新政治體制確立の爲に哲人出でよと絶叫する。

### 日本は日本だ！

我國の教育はその制度に於てまたその内容に於て根本的革新を必要とすることは今更論ずるまでもない。即ち我國の現行教育制度が歐米模倣の産物であり、同時にその内容が翻譯的のものであることは世間周知の事實である。

何等學校教育制度の見るべきものなく、且つ科學的方面に於ける學問に幼稚であつた當時の實情からいへば、教育の制度が歐米の模倣に出發し、且つその内容が翻譯に偏したのは止むを得なかつたことである。然るに教育制度布かれて正に六十年、今尙ほ依然として我國教育制度の内容が翻譯に墮しつゝある現状を顧みるとき、吾人はそこに多くの時弊を發見せざるを得ない。



嘗て明治十四年に元田永孚先生の手によつて『幼學綱要』が完成されたが、これは長くも明治天皇の思召によつたものである。明治十一年のこと陛下に於かせられては北陸、東海の地方を久しく御巡幸の上、各種學校を御視察遊ばされたが、教育の内容が歐米の模倣翻譯に偏して修身教育に缺けたるを憂へさせ玉ひし結果、侍講元田先生に御沙汰があつた結果に成つたものである。

更に明治十九年東京帝國大學に行幸遊ばされた陛下が、同じく我國に於ける人間養成の根柢を爲すべき、修身教育の不十分なるに叡慮を惱まし玉うたことは、元田先生の謹記に成つた『聖諭記』に就て見るも明かである。然るに陛下夙に憂へさせ玉うた缺點は、今尙ほ依然たるものゝあるところに今日の教育内容そのものに大きな革新の必要を痛感するのだ。

自分は「學問に國境なく眞理は普遍的だ」といふ世の主張に敢て反對するものではない。併し國境なき學問が或特殊な事情の上に持ち來された場合には、その特殊事情に適合すべく一種の變化を來し、特殊な意味を把握するところに學問の眞價值があるのだ。

また普遍的な眞理が一度特殊な事情の上に取り入れられた場合には、その特殊事情に由つて

變化を受け、特殊な姿を現すところに健全なる眞理の實在性がある。然るに我國の學者又は教育家にこの自覺乏しき結果、我國の教育が今尙ほ翻譯の域を脱せず、そこに幾多の弊害を醸成しつゝあるのは實に遺憾千萬である。

先年札幌の三角山にスキー場を造つた時のことである。最初傾斜面を北向に造らうとした。然るに、スキスから來た技師が「傾斜面を南向に造り變へなければならぬ」と言つた。これを聞いた日本のスキーヤー達が、「専門の本にも傾斜面は北向に造れと書いてあるし、またお前の國に行つて見ても傾斜面は北向に造つてある。然るに何故こゝでは南向にしなければならぬのか」と訊ねた。すると、「それは雪の性質が違ふ、即ち北海道の雪はスキスのそれと違つて固いから南に取るのが適當だ」といつたといふ話がある。

日本のスキーヤー達が、單に本を読み、また外國の實際を見ながら、何故スキス邊では傾斜面を北向に取つてゐるか、その眞因を確かめる努力なく、たゞ讀んだまゝ、見たまゝを事情の變つた日本の國、否な日本の國の中でも、また事情の異つた札幌に當てはめようとするところに、翻譯的知識の悲哀がある。然るに眞にスキー場造成の原則を會得したスキスの技師にして

始めて、その時、その場所に應じて、變通自在な行き方をすることが出来るのだ、さうしてそれがほんたうの學問であり、ほんたうの眞理である。故に今日の日本が要求するところの學者及び教育家は、實に前者にあらずして後者である。

山鹿素行は寛文八年に著した「謫居童問」に「或は世間文字の學者、異國を以て師とし、國の風俗を異國のそれに改めようとするは誤りであつて、支那と日本とは同じ世界に在るとはいへ、あらゆる點に於て相違があり、従つて大唐の事を以て本朝を評し、本朝に居て異學をねがうては、更に日本の風俗に相應すべからざるなり」といひ、更に「異朝の政あり、本朝は本朝の政あつて、異朝の制よしといふも、異朝にして用ふべし、本朝には用ひがたきこと多し」といつてゐる。

而して斯くの如き素行の主張は今日に於ても誤りなき主張である。即ちロシアは同じ世界上に日本と隣して存在してゐる、併しロシアはロシア、日本は日本である。兩者は決して同一ではなく、それ／＼特殊の事情を有してゐる。故に彼に適する制度なりとも我れには適するものではない。この原理を知るのが學者の任務であり、教育者の責任であらねばならぬ。

自分は重ねていふ……。自分は決して「學問には國境なく眞理は普遍だ」といふ主張に反對するものではない。併し國境なき學問及び普遍的な眞理を「日本國及び日本民族」といふ特殊の事情の上に持ち來した場合には、自らそこに大きな變化がなければならぬ。

日本は日本だ！ 日本には日本獨特のものがある筈だ！ 而して日本獨特のものを創造し得るものは日本人以外にはない筈だ！

紙屑籠

大正四年二月二十八日——それは確か日曜日であつた——の午前九時頃當時臺灣總督府技師であつた僕のところに農事試験場長のF先輩から電話がかゝつて來た。

「今度君は臺北廳に轉任ださうだね」

「そんな馬鹿なことは斷じてありません」

「君はまだ今朝の新聞を読まないね」

「今起きたばかりでまだ讀みません」

「讀んで見給へ、今度の大異動發表の中に君の名も出てゐるよ」

電話はそれだけで切られてしまつた。

新聞を讀んで見ると、この知らせは確かに事實であつた。

山本内閣の財政整理に伴ひ臺灣の官界にも大地震のあることは承知してゐた。併し僕は海外の留學並に視察から歸任して間もないことであり、仕事にも油の乗つてゐる眞最中であつたから今更地方廳に二度の勤めをさせられようとは夢にも思つてゐなかつた。故にこの發表は僕に取りては晴天の霹靂であり、それだけ僕には大きな不満であり、一種の侮辱であるとさへ思つた。

そこで僕は深思熟慮の結果斷然辭職の決心を妻に告げた。

「今辭めれば、明日からは浪人だぞ！それでも不満はないか？」

「私や子供に御心配なく、あなたの所信を斷行していただきます、乞食する覺悟があれば何でもありません」

斯くてこの決心を東京の新渡戸先生に書き送つて同意を求めた。然るに先生からは「後藤男とも相談した、斷じて辭めるな」といふ返電が來た。

ところが、多くの先輩友人から届いた書面は、今でも大切に保存してあるが、何れも弔詞ば

かりであつて祝詞は一通もなかつた。中には「なぜ辭めないのだ？ 貴様はそれ程意氣地無しではなかつた筈だ」と詰問状をよこした血の氣の多い友人も尠くはなかつた。

折から上京中であつた親友M君は不満やる方なく、後藤新平さんを訪問し「どうしても東郷を辭めさせる」と力んだ。然るに後藤さんは言つた。

「東郷の臺北廳轉任は適當な人事行政とは思はぬ、併し何もそんなに立腹するには及ばぬ。君達は紙屑籠には何時も紙屑ばかりはいつてゐると思ふから腹も立つのだ。ところが時には誤つて金銀が紙屑籠の中にほり込まれてゐることもある。我輩も嘗ては内務省の衛生局長を八年も我慢してやつたことがある。人間は逆境の経験も必要だ、東郷だつて暫時紙屑籠の中で我慢するがよい、それも修養の一つだ。斷じて辭めてはいけない、臺灣に歸つたら後藤がさういつたと、東郷によくいひ給へ！」

M君はこの傳言を僕に傳へた。さうして「僕だつて内務省の衛生局なら八年位我慢する。併し臺北廳技師は一日だつて我慢が出来ない」といつては見たが總てを委してある後藤、新渡戸兩大先輩の意志を無視するわけにもゆかず友人達には意氣地無しといはれながらも、遂に辭意

を翻し「紙屑籠」に籠城するの決心をした。

一度この決心がつくと僕の心は極めて明朗となり、そこには何等の不平不満もなく、たゞ一意専心奉公の誠を盡した。斯くて在任一年有半！ 僕は再び元の古巢に歸ることになつた。

その後間もなく僕は上京して、後藤さんを内務大臣官邸に訪問した。さうして後藤さんは僕の顔を見るなり「また總督府に歸つたさうだがそれは當然のことだ。併しこれから先、人を使ふ場合に、自分が臺北廳に遣られた時の氣持を忘れてはならないぞ！ ほんとによい修業をした！」といはれた。

「臺北廳に遣られた時の氣持を忘れないで將來人を使へ！」……僕はこの意味深き言葉を聽いて「矢つ張り後藤さんは偉いな」と思つた。さうして、この言葉がその後の僕にとりてどれだけ役立つたか分らない程である。

「紙屑籠」にほうり込まれて腹が立つのは、まだ修養の足りない證據だ。……人間到る處に修養の道場は在る！ 故に人生には常に「紙屑籠」の中にも人間修養の道場を求むるの努力が必要だ！



良くし、辯にも秀でた多情多恨の才人であつた。

丁度本科二年の秋深き頃彼は肋膜炎を病んで入院の止むなきに至つた。その頃僕等は「アカシャ會」といふ歌の會を組織してゐたが彼もまた同人の一人であつた。

或日慰安の爲め、彼の病室に歌の集ひをした。その際僕の歌に「戀に病むかさなくば才に病める君か神の恵みをわれねたみ見る」といふのがあつた。「みむろ」は蒼白な顔に微笑を浮べながら「これは誰の作か知らぬが實に我が意を得たのだ」といつて喜んだ。

彼はその後退院はしたが尙ほ保養の爲休學の止むなきに至つた。

僕等二人が赤岩温泉に湯治したのは、それから二年も後のことであつた。

四月とはいへ、北海道はまだ雪に埋つてゐる。従つて湯治客は僕等二人きりであつた。さうして女中のミヨキさんが何かと親切にして呉れた。ミヨキさんは體格の立派な、口が馬鹿、大きい而も聲のよい唄の上手な女であつた。

僕等二人の合作に成つた「ミヨキさん、あたしや、あなたのお聲に惚れたマウスでつかいのが玉に瑕……」といふのを「みむろ」が唄つては、ミヨキさんをして「アラ、マーひどいわ

ネ」といはしめたのも一度や二度ではなかつた。

或日湯壺からあがつた「みむろ」はタオルを腰に巻いて土俵入の眞似をして見せた。僕は湯壺の中から「ヨ、日本一、日の下開山！」と叫んだ。

彼はニコリ笑つた。さうして「立派な關取に見えるだらう」といつた。……僕は彼に元氣をつけてやるつもりで「見えるとも！ 常陸山も蹴足だよ」といつた、併しその實、彼の瘠せ衰へた病後の姿を見てはたゞ涙なきを得なかつた。

「お雪」さんはこの家の一人娘であつた。前年「みむろ」が修學旅行の爲めここに泊した折には東京の女學校から休暇で歸つて來てゐた。さうしてその名の如く清淨そのものゝやうな美しさで、甲斐／＼しく立働いてゐた。而も彼の女の無邪氣な接待振りに心をひかれたのは必ずしも「みむろ」一人ではなかつた。

「みむろ」は今度もお雪さんが、きつと春休みで歸つて來てゐるだらうことを楽しみに思つてゐた。併し幾日経つてもお雪さんの姿は見えなかつた。

或晚「みむろ」は思ひ餘つてミヨキさんにお雪さんの安否を訊ねた。……ミヨキさんの朗か

な顔は俄に曇つた。「お嬢様はほんとお氣の毒で御座いました、今年は御卒業だといふのにその春をも待たずにお亡くなりになりました」……さういつてミヨキさんはそつと涙をふいた「みむろ」も泣いた。さうして、まだ會つたことのない僕までも悲しくなつて人生の果なさを感じた。ミヨキさんは最後に「胸が悪かつたのださうです」と付け加へた。

僕等二人が、夕日の海に没し去るのを眺めながら作つた「思ひ入る日」十題の中に

思ひ入る日にぬしはと問へば春の淡雪消えてない

といふのがあつた。いふまでもなく、それはお雪さんを思ふの歌であつた。……げに果なきは春の淡雪！

僕はその年の七月に札幌を卒業した。さうして翌年の二月には臺灣に赴任したが、更に四十二年には獨逸に留學を命ぜられた。

「みむろ」は僕より一年遅れて學校を出たが、その後北海道廳の技師となり、拓殖課の仕事を担当した。

或日彼はマツカリヌブリの山麓に出張中テントの中から遙かに伯林の僕に書を寄せた。その

中には赤岩温泉の樂しかり日の思出も書いてあつた。併しその後間もなく病床の人となつた彼には、再び起つの日が來なかつた。……斯くて青春僅かに三十！彼は遂に白玉樓中の人となつてしまつた。

さうして僕がたゞ獨り、伯林の客舎に彼の死を悲しんだのは、もう二十五年の昔となつた。併し今でも僕は「春の雪」を見る度に「みむろ」を思ひ、更にお雪さんを思ひ出す。げにも果なきは人生！

## 墓地の櫻

今は花咲く春だ！ 故に今日は花について何か書いてみることにする。

花の中で一番大きい花はタイサンボク(泰山木)であり、一番小さい花はノミノフスマ(雀舌草)である。また一番長く咲いてゐる花は菊であり、一番短命なのは朝顔であり夕顔である。

大きい花に、小さい花！ 長命な花に短命な花！ そこに我等は限らない花の美さを感じ、更に大きな詩を発見することが出来る。併し花の中でも、僕の一番好きなのは、何といつても櫻だ。さうして、僕は櫻の花の美しさよりも寧ろその散り際のあざやかさを愛する。

僕は櫻の中でも特に山櫻が好きだ。殊に幼少の頃故郷の山々に眺めた山櫻の野趣に満ちたあの美しさは、今でも忘るゝことが出来ない。

山櫻といへば、僕は直に郷里の墓地に自ら植ゑた櫻のことを思ひ出す。

僕は九つの年に母を亡くした。それが子供心にも悲しくてたまらなかつた。或日弟と共に山から掘り取つて來た何本かの櫻の木を墓地に植ゑた。さうして、これが亡き母に對する幼き者のせめてもの心づくしだと思つた。

それは今から四十七年も前のことで、當時を回顧すれば丸で夢のやうだ。土質のよくない爲めか、櫻の木は今でも思つた程大きくはなつてゐない。併しそれでも、春毎に美しい花は咲く。而もこの花を觀て喜んでくれるのは、單り母のみではない。今では祖父も祖母も、父も姉も同じく地下に眠りながら、母と共に心靜かにこの花を眺めてくれるのだ。

否なそればかりではない。嘗ては亡き母の靈を慰めんが爲めに、僕と共にこの花を植ゑた弟までが、今は自ら植ゑた花の木蔭に、たゞ黙々として永久の眠りを續けてゐるのだ。……老幼不定！ げに果なきは人生！

東京には花の名所が少くない。併しその中でも僕は特に青山墓地の櫻を愛する。……墓地の櫻！ それは僕にとりては思ひ出の種であるからだ！



今年も、僕は二度青山墓地の櫻を觀に行つた。一度は花盛りなる且に！ 更に他の一度は花の散り布く夕べに！

我等の郷土鹿兒島の生んだ歌聖八田知紀翁の歌に

吉野山霞の奥は知らねどもみゆるかぎりは櫻なりけり

といふのがある。この歌を靜かに誦して見ると世は永遠に太平の春を楽しみ得る如うな感じがする。併し花の盛りはたゞ一時！ 馳ては落花の悲しみに會ふのが人生である。斯くて

花を咲かしてまた散らすとは心ないぞえ春の風

といつて、落花を惜み春風を恨むのが人の常である。併し人生には

咲いた花なら散らねばならぬ恨むまいぞえ小夜嵐

といふ悟りが必要だ。さうしてこの悟りに徹底するに於て、初めて花の美しさよりも、その散り際のあざやかさに、櫻の眞價を發見することが出来るのだ。

僕が花の中でも特に墓地の櫻を愛する所以のものは、そこに大きな人生の哲理を發見することが出来るからだ。

畏きことながら、明治天皇の御製にも

人みな惜む心をりながらかぎりある世と花の散るらむ

と仰せられてある。限りある人の世に花見むとするものには、先づこの悟りが必要だ。

風もりのに、はら／＼と墓標の上に散りかゝる花の風情！ そこには靜寂限りなき人生の何ものかを發見し得るではないか？

故に僕は誰が何といつても、墓地の櫻が好きだ！

## 春の思ひ出

いくら春でも、議會はまだ會期三分の一を残してゐる昨日今日、一寸想を練る暇もない。依つて在獨當時の日記をくり廣げ、春の思ひ出の資料として明治四十三年四月頃の日記を読んで見た。僕が役人生活から學生々活に還元した當時の生活がよく現はれてゐるから、左に日誌の二、三を摘録して見ることにする。

○  
近頃は天氣續きで頗る暖かだ、従つて木の芽が急に青くなつて來た。伯林でリンデンの落葉を見た僕は、更にリンデンの若芽に春風通ふの日を迎へた。……月日の經つのは早いものだ！春装せる美人が特に目につく。世は擧げて春だ。

○  
今日の日曜を僕の語學の舊教師たるシュリーマン嬢を訪問した。併し彼の女は病床の人！遂に相見ることが出来なかつた。故に僕は母なる人と色々の話を試みた。

不幸なる彼の女！彼の女は春氣天地に充滿したこの頃を病床に横はつてゐるのだ。……母なる人はいつた。

「人間は健康なるよりよきはなし」  
僕はいつた。

「一日も早く全快あらんことを望む」  
母なる人曰く。

「彼の女はまだ年若き故に！……」  
感無慮！同病相憐む、彼の女も僕と同じく胃病の人！（四月十七日）

○  
今日伯林大學の入學式が行はれた。式は頗る簡單だ。學生券を渡す、入學金十五馬克を支拂ふ。アムメルツングブッフを呉れる。總長のスミッド先生が一場の演説をする、それが済むと

一人々々先生と握手する。それで入學式は終つた。

僕は再び學生々活に還るのだと思ふと、頻りに札幌の學生時代が回顧せらるゝ。面白かつた札幌時代！……伯林大學の學生々活はこれから僕にどんな印象を與へるであらうか？（四月十八日）

○  
高岡先生の紹介状を添へて、ゼーリング先生に手紙を出して置いたところ直に來いといふ返事が來たので今日伯林郊外グルーネ・ワルドの私邸に先生を訪問した。

刺を通じ、暫時應接間に待つてゐると、先生は間もなく書齋から出て來られた。さうして「君がドクトル東郷？　僕はゼーリングだ」といつて握手を求め、そのまゝ書齋に來いといふからつて行つた。

初對面の先生を見ると、體格の偉大な半白の頭髮とアゴヒゲのある元氣のよい老プロフェッサーだ。

先生のゼミナールで研究し度き旨を述べると、先生は喜んで承諾して呉れた。「高岡教授は

僕の弟子だし、君は高岡君の弟子だといふのだから、僕の孫弟子だ」といひながら、研究に對する色々の注意を與へて呉れたが、先づ「内國植民」に關する研究をすることに決した。そこで先生は参考書を教へ、且つ二、三先生の所有せる参考書をも貸して呉れた。……僕はこの親切な老先生に師事することの出來ることになつたのを特に悦しく感じた。（四月廿日）

○  
僕は植民政策を専攻することになつてゐる。故にゼーリング先生は次に世界地圖を開いて日本の部を示し、先づ臺灣に於ける内地植民の將來を語れと要求した。

僕はその大略を説明すると、今度は「樺太にも移民が出來るだらう」といつた。

「出來るには出來ますが、ほんの少しばかりであり、且つ寒いので、たいしたことは出來ませぬ」と答へた。すると先生は「朝鮮にも出來るではないか」といはれた。

先生に就て植民政策の研究に従事しようとするのだから「出來ますとも」といひ度いのだがそこが何とやら……「朝鮮は駄目ですよ」といつて片付けてしまつた。

先生は更に手にしてゐた鉛筆で滿洲の上に大きな圓をグルリと描いて「滿洲もあるではない

か。なか／＼よい移植地だ……』といつて、僕の顔を見て微笑せられた。

滿韓！……ゼーリング教授さへ滿韓は日本に許すべきものだと思つてゐるではないか。……何の遠慮があるものか！ 聲は小さく、仕事は大きく！ 滿韓は世界が日本に許してゐる地域ではないか！

ゼーリング先生が書齋の地圖にグル／＼と描いたその圓形！ 今日グルーネ・ワルドの朝は朗かだ、時は四月二十日の午前九時半！

植民に關する談話の序にゼーリング先生は『アドミラル東郷はお前の親類ではないか』といはれた。

『何でもありません』と答へると、先生は『アドミラルは實にグロッサーマンだ！』といひながら、安樂椅子にもたれ、眼を閉ぢ瞑想を続けられた。さうして如何にも東郷元帥の偉大さに打たれたやうな面持ちで、しまいには大きなため息をつかれた。

『日本には偉人東郷あり』とは全世界のあらゆる國民層に徹底してゐる。これは確かに我日本の世界的誇の一つだ。……併し同姓の東郷實、會ふ人毎に『お前はアドミラルの親類か？』

には閉口する。……(四月二十日)

○

今日からケブナー教授の植民政策に關する講義が始つた。同教授は最近に於ける世界植民の大勢を講じ、我國が新植民國としての活動を論じ、日清日露の兩戦役は東亞に於ける植民政策衝突の結果だと論じた。

即ち露國のシベリヤ經營が進んで滿洲に南下するや、遂に日本の勢力と衝突するに至つた。

而して日本の現状は土地狹隘にして人口多く、外に發展するの止むなき状態にある。而してその臺灣統治の如き實に成績の見るべきもの大なりと説いた。

近來世界の學者が、盛んに日本を論ずる様になつたことは注目に價する點であるが、それにして僕はこの講義を聴いて愉快ならざるを得なかつた。

右の講義が終へた後、僕はアムメルグングブッフに署名を貰ひに行つた。教授は僕の顔を見るなり『日本から來たのだね』といふから『臺灣總督府からの留學生です』と答へた。すると『何！ フォルモサから來た？ それは面白い非常に愉快だ！』といふ。

更に教授は「臺灣總督府で何の仕事を担当してゐるのだ」と訊くから「農政や植民に關する事務に従事してゐるが、今回も獨逸に植民政策を研究する爲めにやつて來た」と答へると、博士はテーブルをたゞいて喜んでゐた。

今の今まで日本のフォルモサ統治を一席辯じた先生だから、大に興味を感じたのは無論のことである。(四月三十日)

○

今から二十五年前の柏林の春！ 植民政策專攻の爲め柏林大學に入學した當初の思ひ出！ その當時に比すれば我國の植民的發展は偉大なるものがあるではないか。

時は春だ！ 然り今や時は日本の春だ！

—一〇・三・一—

### 『理論』よりも『人情』

近年若き者の心が、ともすれば兩親を離れ、家庭を離れ、更に國家を離れんとしてゐる。而もその然る所以のものは、我國の教育が専ら唯物史觀に即した巧利的な智育に偏し、人間教育に最も大切な「人格」を忘れ「精神」方面を輕視した結果ではなからうか？

更にそれは人格教育の本源地たる「家庭」を輕んじ、凡てのものを包容し、あらゆるものを焼き盡さずんば止まないとこの「母性愛」を無視した形式教育の必然的結果にあらずして何であらう？

最近思想犯人が盛んに刑務所に於て轉向したことは世人周知の事實である。而してその主因は、刑務所に訪ねて來た、母、妻、娘等の「愛」に動かされたものだといふ。

一旦思想の悪化したものでさへ、一度温かき家庭愛、母性愛に觸るれば、その思想に動搖を來し、遂に過去の罪を悟つて轉向するに至るといふこの現象は果して何を意味する？

僕がまだ文部省にゐた頃、某高等學校長から聞いた話であるが、或高等學校の一學生が思想問題の爲め注意人物となつた。それを心配して訪ねて來た母親は、氣の毒にも啞者であつた。ものの言へない母親は、母性愛のすべてを打込んだ兩の手を以て子供の手をしっかりと握つた。さうして子供の顔を黙つて見詰めた兩眼からは熱い涙が止めどもなく流れ出た。……さうして母の無言の愛はその瞬間において、子供の思想を轉向せしめずには措かなかつた。げに貴きは母の愛！ 強きは愛の涙ではないか？

現在轉向者の數は約三千人に上るといはれてゐるが、内務省は去る四月十九日の晩に、轉向者に物を訊くの會を開き傍聽を禁止して、いろ／＼な打明け話を聞いた。

その際轉向者達の物語つたところを綜合して見ると、理論闘争を以て轉向せしめようといふ努力は無駄である。轉向に最も有効な武器は結局「人情」であるといふことに一致した。……『理論よりも人情！』ただそれのみに我等は凡てを動かすに足るべき大きな力を發見し得るではないか？

一旦悪化した思想の持主さへ理窟を抜きにした人情——即ち愛の力によつて轉向せしめ得るといふならば、思想の悪化は主として愛の缺乏に基因してゐることも明かである。……愛なき家庭、愛なき社會！ そこに思想悪化の病源は宿つてゐるのだ。

故に兩親より離れた若き者の心を兩親に返し、家庭から離れたその心を家庭に返し、更に國家から離れたその心を國家に返さんとするには「愛」に出發しなくてはならぬ。……國家愛、社會愛、同胞愛、家庭愛、母性愛、凡て愛は一つだ！

聖徳太子十七條の憲法にも先づ第一に「和を以て貴しと爲す」と教へられてゐる。「和」は日本精神の眞の姿だ。「和協の心」こそ我等日本民族のみが持つ眞の美德ではないか？

古來我國には「權利」とか「義務」とかいつた様な對抗的言葉は存在しなかつた。さうしてこれ等は凡て「つとめ」といふ言葉で表現せられてゐた。従つて對抗的言葉のない我國には階級闘争のありよう筈がない。我國古來の辭書には見ることの出來なかつた舶來品の爲めに日本人特有の美德までが攪亂されてたまるものか。

我等は速かに『和協の心』に還らねばならぬ。『和』を中心として九千萬國民の『愛の心』が統一せられるとき、そこに始めて我等は『神代ながらの尊き日本の姿』を発見することが出来るであらう。而して『愛の教育！』それは先づ家庭に於てこれを始めなくてはならぬ。

カーライルは『人間の愛は決して金で購ふことは出来ない。而も我等はこの愛なしには他人と共存することはとても出来ない』といつてゐる。即ち『和』を目標とした人生はたゞ愛の力によつてのみこれを營むことが出来る。さうしてその愛は金で賣買の出来ないものだ。……愛の唯一の代價は『愛』である、故に『愛の教育』は『愛』によつてのみこれを達成することが出来る。

西洋の諺に『愛は愛の母だ』とあるのも即ちそれではないか？『理論よりも人情！』そこにほんたうの人生は在るのだ。

## 『智慧』と『力』

チューホフは牧人に『神様は人間に智慧をお授けになつたが、同時に人間からは力をお取り上げになつた』と書いてゐる。僕は我國の教育の實際が、丁度それではないかと考へる。

我國の學校教育は確かに一般國民の知識を著しく向上せしめた。併し悲しいことには、知識を實際生活の上に強く正しく實現せしむるに必要な『力』が充分に與へられてゐない。そこに我等はあらゆる行詰りの根源を発見する。故に今日の急務は、國民に『力』を授ける教育に徹底することだ。然らば『力』とは何ぞや？……ここにいふ力とは『精神力』のことだ！

嘗てプロイセン王國がナポレオンとエナに戦つて敗れ、一大國難に遭遇した際、愛國哲人フヒヒテはあの有名な『獨逸國民に告ぐ』と題する講演を試み、その敗因が獨逸國民の精神力の

缺乏に在るを痛論し、國難打開の途は祖國愛を中心とした全獨逸國民の精神的結合に在るを力説し、「新教育の根本精神は、獨逸國民に偉大なる精神力を附與することだ」と絶叫した。

斯くて獨逸の新教育は、そこに進展の途を求めた。さうして他日獨逸が普佛戰爭に勝利をかち得たのは、全くこの新教育の賜であつた。

世界大戰前に於ける獨逸の發展は實に驚くべきものであつた。科學の進歩、産業の發展、實に物質文化黄金の時代を出現した。ところが獨逸の青年學徒は夙くもそれに甘んぜず「物質よりも尊い或物」を求め「金力に優る精神力」を思ふの餘り、一種の新運動を開始してゐた。

然るに大戰の結果は一敗地に塗れたが、戦後一九二六年に斷行した共和政府の教育改革案に就て見ても獨逸は依然として「精神教育」に國難打開の途を求めてゐることが窺はれる。即ち時の文部大臣ベッカー博士の師範教育改革に関する講演を読んで見ても明かにその精神を諒解することが出来る。

また或獨逸人は「獨逸の敗戦は寧ろ幸福であつた、何となれば我等は地下に眠れるフキヒテを再び地上に呼び戻すことが出来たからだ、然るに戰勝國たる英佛その他の諸國にはそれが出

來ないではないか」とさへいつてゐる。この一事から見ても獨逸が戦後の物質的行詰打開の途を主として國民の「精神力」に求めてゐることが解る。さうして教育改善の根本もそこに出發してゐるのだ。

大戰後に於ける獨逸の經濟的行詰は言語に絶してゐた。然るにこれが打開の途を「精神力」に求め、教育改革の重心を人格陶冶を中心とした精神教育に置いたことは、特に注意を要すべき點だ。

物質的に足らざるところは、精神力を以て補ふことが出来る。併し精神力に缺けた場合にはこれを補ふべき何物も發見することが出来ない。故に國難打開の途は常にそれを國民の「精神力」に求めなくてはならぬ。而も我國の教育が、この點に缺けたるところありとするならば、我等は何を差し措いても、先づこれが革新に邁進しなくてはならぬ。

教育の眞目的は人間に於ける「知情意」の三者を完全に有機的に統一する點に在る。故に「知の教育」は「全人」完成上無論必要だ、「知」を抜きにした教育は在り得ない。僕が常に實業教育の徹底を主張する所以もそこに在る。併し徒らに教育が「知」に偏して、情意の陶冶に缺



くるところがあつたならば、人間は「機械」に使はれ「金」の奴隷となる虞がある。而も我國の現行教育制度にその弊ありとするならば、これが排除は實に今日の最大急務ではないか？

我國の學校教育が今日の如く常に各種知識の分離的修得であり、その間何等確乎たる連絡もなく、統一もない實情なりとするならば、それでどうして「人間」としての完全な修養が出来るものか。

故に今日の急務は「全人格」の陶冶であり、「全人」の完成である。……否な「全人」としての完成を期する前に、先づ「日本人としての全人」を完成することが何よりも急務だ。

我國には古來優秀な「精神文化」が嚴存してゐた。その精神文化を土臺とし、西洋の物質文化を輸入したところに今日の驚くべき新文化の發展がある。然るに今や「精神文化」は外來の物質文化に壓倒せられ、その英姿を深く地中に没してゐるのだ。

故に我國固有の「精神文化」を再び地上に呼び戻し、その實力を遺憾なく發揮せしむることに、教育の新使命があり、國難打開の基礎が存在するではないか！

—一〇・五・一〇—

### 木 堂 先 生

今日は五月十五日、丁度犬養木堂先生の三周忌に當る！

回顧すれば、昭和七年の五月十三日——それは僕の結婚滿二十五年の記念日であつたが、その日の午後二時、僕は三土選相を選信省の大臣室に訪ねた。無論それは選相からの要求があつたからのことだ。

選相は選信參與官に就任すべく熱心に説かれた。さうしてそれは犬養總理の要望であり、床次鐵相も同意を表してゐるのだといふのであつた。

併し、僕はその當時政友會の總務でもあつたから、選信省の役人になつて一局部の仕事に偏するよりは、寧ろ自由の立場にあつて、農村問題その他の政治問題に努力する方が、政治家と

しての責務を果す上において都合がよいと考へた、故にこれを固辭した。

然るに三土さんは理を盡し、情を述べて就任の然るべき所以を親切に説き速答を促された。僕は先輩と相談する爲め三十分間ばかりの猶豫を求めた。三土さんは「先輩とは床次君のことだらう、それなら電話で用が済むではないか」といひながら、自ら卓上電話を以て床次先生を呼び出された。

僕が電話にかゝると、床次先生は「三土君の要求通りしたまへ、左様なら！」といつて、さつさと電話を切つてしまはれた。その瞬間に僕は受諾を決心した。さうして「お役には立ちますまいが何分宜しく」と返事した。

三土さんは喜ばれた。さうしてそのまま犬養總理に報告せられ、その晩の内に持廻閣議で任命の手續が運ばれ、翌十四日の正午頃にははやくも御裁可を了するに至つた。

十四日は土曜日であつたが、その日の午後一時過には逓信省から辭令が出たとの知らせがあつた。併し既に退廳後と思つたから、月曜日の午前に挨拶のため登廳する旨を答へた。

丁度その日の夕刻であつた、僕は御禮挨拶のため犬養總理を官邸の日本間に訪問した。總理

は「色々希望者もあつた、併し黨の事情は君を煩はすより他にないと考へ、三土君とも相談し、床次君の同意を得たので、君に相談して貰つたわけであつた。引受けて呉れてわしも安心した」といつて非常に喜ばれた。

僕は驚馬に鞭打ち奉公の誠を致すことを誓つて辭去した。

然るにその翌日の日曜日にはやくもあの遭難！僕に向つて「わしも安心した」といつた總理が一晝夜の後、同じ場所で「話せば解る！」の一語を残しつつ、雄々しくも兇弾に倒れようとは神ならぬ身の夢にも思はなかつた。

翌十六日午前十時内閣は總辭職に決し、僕もまた辭表を提出し、午後漸く逓信省に至り、辭令を受取り、新任の挨拶と共に辭表提出の旨を述べた。

世の中には「三日天下」といふことがあるが、これはまた辭令を受取らない前に、夙くも辭表を提出したわけで、その間僅かに二晝夜！如何にスピード時代とはいひながら、實に前代未聞のスピードではないか！

斯くて五月二十七日には依願免官となり、更に六月二日には齋藤内閣の文部政務次官に就任

した。併し今から當時を考へると總ては丸で夢の様だ！

今日の命日に當り、僕は夕暮近く青山の墓地を訪ねた。さうして雨に濡れた新緑の色にひとしほの静けさを感じつゝ、木堂先生の墓前にたどりついた。

僕はたゞ獨り花に埋まつた墓標の前にぬかづきながら靜かに冥想に耽つた。さうして「わしは安心した！」といひ「話せば解る！」といはれたあの先生の聲が今にも地中から聞えて来るやうな氣がした。

僕は更に官邸の日本間に最後に見た先生の猫脊になつたあの姿を思ひ浮べながら、無意識に天を仰いで見た。

雨上りの空は清らかに晴れて、そこには十三夜の月か夙くも靜かな光を投げてゐた。……時は正に午後六時五十分！

——一〇・五・一五——

## 千年後の世界

明治四十三年五月一日の僕の滞獨日記に次の如く記されてゐる。

伯林の天空には絶えず飛行機が浮動してゐる。飛行機に對するカイザーの熱心は大したものだ。昨年八月初めてツェッペリン伯が飛行船に乗つて伯林を訪問した時の如き、カイザー自ら自動車をウンター・デン・リンデンに驅り、國民大衆に向つて情報をふれ廻つたとまでいはれてゐる。

十八世紀の中葉に於て、佛蘭西の文豪ボルテールが「英吉利は海を支配し、佛蘭西は陸を支配し、獨逸は空を支配す」と稱して、當時無力であつた獨逸を冷罵した。……而も今や獨逸は佛蘭西を壓して大陸の霸王となり、海軍の擴張を行ひ他日海上の支配者たらんとしてゐる。更

に飛行機の驚くべき發展は、將來必ず空を支配するに至るであらう、斯くして「獨逸は海、陸、空の三者を完全に支配す」と稱する時代が聽て來るのではあるまいか？

さうなればボルテールの冷言、却つて獨逸の將來を豫言したわけにもなる。

「空の支配者獨逸！」

更に五月四日の日記には次の如く記されてある。

今日語學の教師——無論女教師だ——との間に戦争談が試みられた。僕は「英獨兩國間に戦争が起ることがあるだらうか」と訊ねて見た、すると彼の女は「それは何ともいへぬ。併しカイザーは凡てを爲さんと欲してあせつてゐるから戦争が起らぬとも限らない」といつた。……「カイザーは凡てを爲さんとす」とは實に至言だ！ 故にカイザーのこの世に存在する限り世界の平和は到底望まれない。

その後多年ならずして遂に英獨の間には戦争が初まつたそれが即ち世界大戦である。獨逸國民自ら稱した様に「カイザーは凡てを爲さんと欲してゐた」ところにこの戦争の主因の一つが潜んでゐたのだ……「陸を支配し、海を支配し、更に空を支配せんと欲した」カイザーの夢は

遂に世界大戦によつて破れた。併し獨逸民族は今日といへどもこの理想を棄てゝはゐない。カイザーに代ふるにヒットラーを以てした現在獨逸の伸展こそ見物ではないか。

女教師と僕との會話は尙ほ續けられてゐる。

「印度は獨立するだらうね」と女教師はいつた。

「僕の視て來たところから推論すれば、印度の獨立は一寸見込みがない。併しそれにしても永久に英吉利の物だとは何人もいひ得ないよ」と僕は答へた。

今度は「千年の後には亞細亞から白人は悉く驅逐せられるであらう」と來た。そこで僕が「そんなことはないさ、印度でも人口は多いが、今日の状態ではとても駄目だよ」といつた。

「でも、日本があるではないか、亞細亞は凡て日本のものさ」と彼の女はいつた……さうしてほんたうにさう思つてゐる様な顔色を見せてゐた。

「亞米利加は米國のものであり、日本は亞細亞を統一する。併し同時に歐羅巴も統一されるであらう、そしてきつとロシアが歐羅巴の覇者たるに至るであらう」と彼の女は付け加へた。更に「千年後に一寸出て來て、世界の變化が見度いものだね」といふに至つては益々同感だ。

而もその時代に至れば天下は日本のものだ。

「天下は遂に一國たるに至るだらう」といへば「千年位ではまだそこまでは行くまい」と彼の女は答へた。聽て歸路に就くと、天空には飛行機が爆音を立てながら飛んでゐる。……何だか此奴が、將來天下統一に一役買つて出さうな氣がする！

爾來正に二十有五年！ 世界の變化は餘りにも偉大なるものがある。

嘗て二十有五年前初めてフランクフルト・アム・マインから伯林に飛んで来てカイザーを熱狂せしめたツラペリン飛行船は先年その雄姿を我が日本の天空に現はし、遂に世界一周の壯舉を完成した。而もそれは夢の如くして決して夢ではない。

國家の生命は永遠である、我等は千年の將來を考へ眞の國策樹立に精進し、國運の進展に資するところがなくてはならぬ。

——一〇・四・一〇——

## 大山元帥

僕は去る三月十日の陸軍記念日に當り、東京劇場に上演中の『大山元帥劇』を観た。さうして更に高島屋に開かれた『大山元帥展』を見て、今更ながら元帥の偉大さに感激せざるを得なかつた。

鹿兒島市においても過日『大山元帥展』が催されたと聞いてゐるが、これを觀た人達は、恐らく、僕と感と同じうせられたことゝ信ずる。

明治四十四年の春であつた。ロンドンの街は名物の霧に包まれた或る日の午後、僕は同宿の建川大尉——現陸軍中將建川美次君——と暖爐にあたりながら雑談にふけたことがあつた。

『大山元帥が日露戦役の總司令官として立派な成績を挙げ得たのは、何も知らないで萬事を

明敏な兒玉總參謀長に一任せられた結果であらう」といつたのが僕であつた。「それは大變な間違ひだ。大山元帥は凡てを知り抜いてゐながら、何も知らない如うな振りをしてゐたのだ。さうしてそこに我等は日本一の總司令官を持つことが出来たのだ」といつたのが建川君。さうして建川君は當時の事情を審さに話して呉れた。

今から三年ばかり前のことであつた。我國の現状に満足し得ない僕は、或る日財部大將を訪ねて「大山元帥の如うな大人物のゐなくなつたことが、現代日本行詰りの眞因だ」と述べた。その際財部大將は山本伯から直接聞いた話だといつて次の如うに語られた。

大山元帥が滿洲軍の總司令官として出征の決心をせられた際、山本海軍大臣を訪問せられた。然るに山本伯は「あなたがお出かけにならんでも、外に人はいくらもあるではありませんか」といはれた。ところが元帥は「山縣さんにお願が出来れば、それに越したことはないが、あの御健康では、留守居役をお願ひするより外にないと思ひます。また他にも立派な人はいくらもあるが、全軍を纏めて行くには失張り自分が奮發するのが一番よいと思ふから行くことにします。併しこの戦ひはとても敵の頸首を絞るわけには参りませんぞ。だから、山本さんお願

ひして置きますが、潮時を見て軍配を擧げて下さい！」と云つて、自ら出征されたといふことだ。

僕はこの話を聽いて、先年ロンドンで建川君から聞いた時の話を憶ひ出して成る程と思つた。僕はこの時まで、奉天會戦を最後にあの戦争を打切る手段を取つたのは、兒玉大將の發意に出でたものだとばかり思つてゐた。……否な僕ばかりではない、世間も一般にさう信じてゐるのだ。然るに何ぞ知らん、大山元帥は出征前、夙くもその點に着眼し、潮時を見て兵を收めるの途を講ずるよう山本伯に頼んで行かれたのであつた。……その深慮、その達眼！ 眞に敬服の外はない。

最近竹下海軍大將にお目にかゝつた際にも同様の話を聽いた。語る人を異にして、同じ話を三度も聞かされたわけであるが、何れも元帥をよく知つてゐる人の語るところであるから、話に誤りはない筈だ。

この間の議會中、或日軍部出身の某々代議士と衆議院の食堂で元帥の話をしたことがあつた。その際M君から聽いた話だか、元帥の令息柏公が嘗て父元帥に「一番辛かつた経験は？」とた

つねられた。すると元帥は「知つてゐるのに知らない振りをするのが一番辛かつた」と答へられたといふことだ。世間でもよくいふ話だが、陣中の大山總司令官はよく「兒玉さん！ 大變大砲の音がしますが、どこかで、また戦さが初まりましたかな？」といはれたと聞いてゐる。併しこれは元帥が凡てを知り抜いてゐながら、何も知らない振りをしてゐられたのであつて、そのとぼけた如うな態度に、卓越した元帥の總司令官としての眞面目が躍如としてゐるではないか。

それにしても「知つてゐて知らない振りをするのは辛い」と元帥でさへ告白せられたとするならば、僕達の如うな平凡人には容易に眞似の出来ないことかも知れない。しかし何事も努力だ！ さうしてそこに人間修養の必要もあるのだ。

何も知らないくせに知つたか振りをし、十のものを百にも千にも宣傳する今の世の中！ 自己宣傳の上手な小利口者が時を得顔に羽振を利かす日本の現状！ そこに現代日本行詰の眞因が在るのだ。

故に僕はこの時弊を一掃すべく「目から鼻に抜ける如うな小利口者」を絶対に排撃する。さ

うして大山元帥の如うに、内には絶大無限の智識と膽力とを包蔵しながら、これを外に現はさず、ただ悠揚迫らざるの態度を持し、しかも國家民人のためには、何時でも命を投げ出すといつた如うな大人物の出現を希望して息まない。

## 松葉杖

世の中には氣の毒な人が少くない。併しその中でも、僕は特に脚の不自由な人を氣の毒に思ふ。殊に「松葉杖」にすがりながら街頭を歩いてゐる人のいたましい姿を見る時、僕の心はたまらない程の痛みを感じる。

而もそれには二つの理由があるが、今日はその中の一つを書いてみることにする。

郷里の父が中風で倒れたのは、昭和元年十二月二十八日の夕方であつた。併し僕が翌年の四月議會の終了を待つて歸省した頃には、餘程の輕快を見せてゐた。

父は「少し早いかも知れぬが」といひながら遺言までしたのに、その後病狀は快復の一方であつた。従つてこの分なら當分心配はないと考へたので、僕は間もなく東京に歸つた。

ところが、昭和三年の二月に行はれた普選第一回の總選舉決ばに、父は選舉に心を痛めた結果でもあらうが、病狀俄に一變して今度は全く脚が立たなくなつてしまつた。

或日の夕方、政戦から久しぶりに歸つて見ると、父はこの始末。僕は早速父を病床に見舞つた、併し父は「俺は病氣ぢやない、たゞ脚が立たなくなつたまでのことだ」といひ張つた。

さうして「お前は今政戦の眞最中ではないか。今のお前には戦ひに勝つこと以外には何者もない筈だ。俺のこと等心配する必要はない。早く出て行け、さうして完全に闘つて必ず勝て！」

俺はお前の勝利を病床から祈つてゐるぞ」といつた。

我が子に勝利を得させ度いばかりに「脚は立たないが、病氣ではないぞ」といひ張る父の心中！僕はただ親心のありがたさに涙しながら、看護の暇もなく再び政戦の途に就いた。

あの時の選舉は今でも不愉快に思ふ程の壓迫と干渉とを受けた。併し勝利は正義に味方して遂に當選の光榮に浴することが出来た。

僕は多数有権者各位に感謝しながら父を喜ばすべく歸りを急いだ。さうして僕の凱旋を待ちわびてゐた病床の父は、満足の微笑をたゞへながら僕を迎へて呉れた。



然るに次の瞬間において、父は更に「當選した以上、お前は公けの人だ、俺の病氣を心配する必要はない。これから直に東京に歸つて公人としての義務を果せ！」といった。

僕は父の命に従ひ間もなく東京に歸ることになった。丁度出發の日のことである。今日こそはゆつくり父を慰めてから發たうと思つてゐた甲斐もなく、雜事に妨げられて夙くも午後の三時になった。鹿兒島行の乗合自動車は門前に止まつたかと思ふと、頻りにブー／＼鳴らして乗車を促した。

僕はお別れの挨拶をなすべく、急いで父の病室に行つて見た。父は「松葉杖」を頼りに幾度か立ち上らんとしては、その都度床の上に倒れてゐた。そのいたましい姿を見た僕の胸はただ涙で一杯になった。

父は僕の顔を見るなり、「せめて玄關まで見送り度いと思つて、先刻から何遍も立上らうとして見たが、残念なことには、どうしても脚が立たぬ。父のこの悲しい氣持を察して呉れ」といつた。

「臨時議會が済めば、また直に歸つて來ます。うんと養生して、それまでには、きつとよく

なつてゐて下さい。見送りなんかありませんよ」と僕はいつた。……父は片手に「松葉杖」を握りながら、床の上に坐つたまゝ、僕を見送つて呉れた。さうして父の眼には無論熱い涙が宿つてゐた。

僕は後髪を引かれながらも、思ひ切つて自動車に乗り込んだ。さうして何も知らない運轉手は、何時もの通り、まつしぐらに自動車を馳らせて行つた。……而もこれが嚙て生別死別にならうとは神ならぬ身の知る由もなかつた。

斯くて四月には臨時議會が開かれた。さうしてこの議會こそは僕にとりて、最も悲しい思出の種となつた。

丁度この議會央ばに、僕は父危篤の電報を受けとつた。「歸るべきか、はた歸らざるべきか？」僕の心は悩みに悩んだ。併し父からは常に「政治家としての義務、國士としての責任」を説き聽かせられてゐた。……父日頃の教訓に従へば、この際歸らないのが父の意に副ふ所以だと考へ、遂に歸らざるの決心をした。併しこの決心は雄々しくも、また悲しい決心であつた。

僕は床次先生を訪ねて、この決心を語り、先生の判斷を仰いだ。先生も「この際國家のため

凡ての苦痛を忍べ！」といつて、僕の決意に同意せられた。

かくて僕は公人としての義務を果すべく、東京に踏みとどまつた。さらに「父死す」の急報に接するも歸らず、遺るせなき心の痛みを喪服に包みながら登院を續けた。……政治家としては、その使命を立派に果し得た喜び！ また子としては父の死に會ひながら歸り得なかつた心の悲しみ！ 併しそこにほんたうの人生があるのかも知れない。

「松葉杖」を頼りに幾度か立ち上らんとしては、床の上に倒れてゐた、あの時の父の姿！

父がこの世で僕に見せて呉れた最後の姿は、即ちこれであつた。このいたましい父の姿、それを忘れてなるものか。

自分の病苦はこれを打忘れ、我が子の門出を見送らんとした、あの時の父の努力！

そこに子を思ふ親心のほんとの尊さを發見するではないか。

——一〇・六・五——

## 花は霧島！

近頃愉快に堪へないことの一つは、我が郷土の生んだ民謡「小原良節」が、天下を風靡してゐることだ。

僕は地方に出かける機会が多いが、今や全國到る處に、なつかしき故郷の唄を聴くことが出来る。而もこの大流行が、一女性の努力にその源を發してゐることを思ふとき、そこに一種の大きな教訓を感じるではないか。

何事によらず「他所のもの」は優れて見えるものだ。我國が明治維新以來、一も二もなく、西洋の文化を模倣し來つたのも、いはゞこの一般心理の現れに過ぎない。

明治天皇は畏くも「よきをとり惡しきをすてて外國に劣らぬ國となすよしもがな」と教へ玉

うた。然るに一般國民がこの大御心を察し奉らず、たゞ外國のものとさへいへば、是非善惡の見境もなく、無闇にこれを探り入れたところに今日の行詰りがある。故にこれが行詰り打開の爲には、速かに建國の精神に甦り、外に向つて盛んに『天業恢弘』の大經綸を行ふことが必要である。

それとは無論話は違ふが、我が鹿兒島には古來多くの優れた郷土藝術があつた。然るに近來動ともすれば、外來の『安來節』や『佐渡おけさ』それに新作の小唄までが矢鱈に巾を利かし、従來の郷土生えぬきの藝術が占めてゐたその王座さへも、これを新來の藝術に譲らんとするの傾向があつた。

この間違つた行き方に大きな不満を持つてゐた僕としては『小原良節』の花々しい縣外進出に對し一種の感激を覺ゆる。

さうして數ある『小原良節』の中でも、僕は色々の意味に於て、我が郷土の持つ特質の總てを最もよく表現してゐるのは、矢張り『花は霧島、煙草は國、分燃えて上るは櫻島』といふ唄だと思ふ、故に僕は理窟を抜きにして、たゞ何となく、この唄が好きだ。

去る五月の三十日から六月の一日にかけて僕はたゞ一人霧島温泉に雲隠れした。それは友人石井滿君の著した恩師新渡戸先生の傳を読み、出來得れば、豫て出版元から頼まれてゐる『讀後感』を書かんが爲めであつた。然るに新燃岳のツツジが丁度見頃だと聞いては、矢も楯もたまたま、遂に豫定の一部を変更してしまつた。

霧島は國立公園になつた。否霧島は高千穂の靈峰を中心として、我國の淵源を成した尊い靈地である。……その靈地に今や時を得顔に咲き誇つてゐる名花を賞しながら、あの代表的な『小原良節』に表現された唄の氣持を心ゆくばかり味はつて見たいと思つたのが、豫定變更の動機であつた。

六月一日の午前六時、霧島館を出發して新燃岳に登つた。……登つたといへば、いかにも偉らさうだが、その實二十貫に近い大きな身體を四人の人の肩に托したまでのことだ。故に登つたといふよりは、寧ろ運ばれたといふのが、その真相だ。

明礬から新湯へと登り行く森林地帯。……その静けさは、さながら太古の如きものである。而もその静けさに、いかにもよく調和して鳴く鶯と郭公！ それに時折、時鳥の鳴く音さへ聽

くことの出来るうれしさ！

馳て森林地帯のつきる處、そこには神代の姿をそのまま語るが如き原始的な、而して悠久そのもの、様な夢の如き草原地帯を發見する。さうして、そこには數百町歩に亘り、ツツジ（映山紅）の美しい大群落が心のまゝに展開されてゐる。而も奇岩怪石の間、紅、紫とりんごの花の色！ 見れば全山悉く焰の如き霧島の初夏！

「花は霧島！」げに唄の文句そのままの美しい姿ではないか。

この日は珍らしく天は晴れ、氣は澄んでゐた。僕はこの美しい自然の花畑に、佇すみながら、心靜かに四方を眺めた。さうして、ほがらかな南國の空にそより立つた高千穂の峰を間近かに望みながら、たゞ一人なつかしき思ひ出に耽つた。

丁度十三歳の頃であつた。僕は小學校の修學旅行に、やす／＼と高千穂の絶頂を踏破したことがあつた。その時の健脚に比べて、今この身の不甲斐なさが、つく／＼恥しくなつた。……駕籠で登つて來たこの身の意氣地なさ！ それにしても年は取り度くないものだと思つた。

僕は高千穂の峰が好きだ。殊に僕の郷里財部方面から見た高千穂の姿は實に天下一品だ。……

あの天空に高く聳え立つた高千穂の靈峰を仰ぎ見るとき、そこには神代ながらの尊い姿を發見するのだ。さうしてそこに我等は「建國の大精神」を感得することが出来るではないか。

「花は霧島！」といふが、我等はその霧島に「國體の精華」を發見するのだ。單りツツジのみが霧島を代表する名花ではない……霧島に咲くほんとの花は「國體の精華」だ。さうしてこの華にこそは全日本の貴い魂が——生命が永久に宿つてゐるのではないか。

僕はこんなことを考へながら馳て山を下りた。さうしてその日の夕方には、風くも豫ねて約東の講演を試みるべく、鹿兒島市は産業會館に於ける壇上の人となつた。